

匪賊の頭目が開祖した

金日成王朝



『まえがき』	1	「金日成と前田警察隊の全滅」	31
「朝鮮半島と私」	2	「金日成の闘争方針の変更」	32
『朝鮮半島の歴史の概要』	3	『金日成の入ソ』	33
「高句麗」(コクリ)	5	「入ソ中の金日成の行動」	34
「渤海国」(ボヘイコク)	6	『ソ連の対日宣戦布告』	36
「高麗」(コライ・コマ)	7	「第88狙撃特別旅団の 朝鮮人たち」	37
「百濟」(ペク)	9	「第88旅団の朝鮮への出発」	38
「新羅」(シラ・シンラ)	11	『化けの皮をあらわす』	39
「三韓とは」	13	『金日成はなぜリーダーに なれたか』	40
「李氏朝鮮」	14	『素顔を見せた金日成と38度線』	41
「私の朝鮮半島観」	15	『金日成の歴史の改竄(カイザン)』	42
『金日成』	16	『朝鮮戦争』	44
「金日成の生い立ち」	16	「朝鮮戦争の準備」	44
「金日成の吉林留学」	18	「朝鮮戦争の経過」	46
「満洲の朝鮮人社会の政治状況」	19	「南北朝鮮の戦禍の傷痕」	48
「金日成少年の放浪」	19	「私と朝鮮戦争」	49
「中国・朝鮮共産党の合流」	20	『金日成の粛正開始』	50
『満洲抗日戦争の始まり』	21	「邪魔者は消せ」	52
「満洲事変の勃発と中国共産党」	21	『嘘と粛正で固めた金日成王朝』	53
「東満の遊撃隊組織と金日成」	22	『金日成の神格化』	55
「金日柱を金日成に改名した理由」	24	『世襲の金正日』	56
「金日成と抗日第1路軍」	25	『金正日の神格化』	57
「朝鮮人民革命軍名称の謎(ナゾ)」	26	『不可解な国・北朝鮮』	58
「在満韓人祖国光復会」	27	『あとがき』	59
「普天堡襲撃事件」	28	『付記』『イラク戦争』	62
「関係者の逮捕と組織の壊滅」	29		
「蘆溝橋事件の発生(日中戦争)」	30		



『まえがき』

平成15年の「幕の内」の1月11日付読売朝刊第一面に『北朝鮮「NPT」脱退』^{セトギツ}『瀬戸際
の超強政策』^{チョウキョウコウサク}と大見出しの活字で印刷されていた。北朝鮮がこの核拡散防止条約から脱退を宣言
したのは、核施設の再稼働に動いた北朝鮮に対する日米韓協議で、米国が対話の用意があると表
明した直後のことであった。国際原子力機関（IAEA）が最後の機会を与えようとして核施設
の凍結解除の撤回など、前向きに対応を北朝鮮に促したばかりの直後であった。北朝鮮がNDT
脱退宣言で応じたことは、国際社会に対する傍若無人な宣戦布告だと言うべきである。

一方、9・11同時多発テロ事件勃発以来のブッシン^{ボッパツ}、統領の顔をテレビで見る限り平常
心の顔ではない。特に今年の彼の顔付きを揶揄して皮肉って言えば、猿蟹合戦の血走った猿のよ
うな目付きである。イラク、イラン、北朝鮮を「悪の枢軸国」と名指した彼は、先ずイラクに対
し、「核、化学、生物兵器を保有する無法者の政権は世界にとって最大の脅威だ」と査察を開始
した。1月末日現在、イラクの大量破壊兵器の決定的な証拠が未だ報告されていない。世界の警
察官を自認する彼は決定的な証拠が無い場合でも、査察に対する非協力姿勢などを理由に、同盟
国有志だけで武力行使に踏み切ると宣言し、クエイト諸国などに約15万の兵力を集結させてい
る。仏、露を始め安全保障会議内の多数派は、「査察による解決という道筋に更に時間を与える
べきだと反対し、数ヶ月間の査察継続論を主張していた。これに対して漸く米英両国は、査察の
の延長を承認した。しかしブッシュ大統領の「単独行動主義」への国際的な批判の高まる中で、
喧嘩腰で彼は「米国民は他者の解放のために犠牲を払う」と述べ、世界の安定のために武力行使
も辞さない決意を表明し、唯一の超大国の責務（？）を明確にした。これらの流れを見ると日米
開戦に引きずり込まれた当時が思い出される。米英は軍国主義を通り越した戦争主義ではないか
と感じさせられ、どちらも戦犯国である。第一次世界大戦後の世界大恐慌時代を経験した我々年
代の人達にとっては、苦しかった当手を回顧すると、「戦争より経済」だと絶叫したいのである。

アフガンは砲爆撃と戦車の蹂躪によって平和が訪れただろうか。難民は救済されたであろうか。
ビンラーディンが率いるアル・カイダの次は、悪の枢軸国の筆頭であるイラクに照準を移動した。
米国と一心同体のイスラエルは右派が大勝し、テロと戦争は激化するばかりではないだろうか。

再び眼を北朝鮮に眼を移すと、1月31日付夕刊は「核兵器開発は北朝鮮にとって米国との交^{コウ}渉のカードである」との見方が一般的だと報道した。北朝鮮は核^{オド}の脅かしをテコに米国を交渉のテーブルに引っ張り出すことを目標に定めており、金正日の最終目標は核保有である。私は、現時点での米国はイラクと北朝鮮と戦う二正面作戦はできないと判断しているが、彼の今回の行動はそこを狙っているのではないだろうか。米国は北の軍勢力を侮^{アナド}ってはいないようである。

一方、我が国に対する北朝鮮の日本人拉致事件は主権侵害行為であり、野蛮な人権蹂躪である。北朝鮮は長期にわたって拉致を「でっちあげ」^ハと言い張ってきた。しかし昨年9月17日にわが小泉首相が初めて平壤を訪れると、金正日総書記は拉致をあっさりと認めた。ところが、それで問題が解決したわけではない。共産主義国家が平気で誤りを認めるのは、次に何かとんでもない要求がある時だけである。今回、13人の拉致者のうち5人だけが10月15日に帰国し日本の土を踏んだが、残る8人は死亡したと伝えた。そして詳しい死亡の状況も不明であるばかりか、帰国者5人の子供を北朝鮮が押さえているように、北朝鮮はいつも恐怖カードを使うのである。今回、北朝鮮が拉致を認めた最大の理由は、米国の武力攻撃を恐れて日米分断作戦をはかり、我が国からの経済援助を求めることが第一であると私は判断している。

日本の当局が北朝鮮による拉致だと判断できるのは、基本的には傍受記録である。それに加え、日本の与党、野党議員たちの拉致に対する無責任な言動も見逃せない。許せないのは議員ばかりではなく、新聞や知識人と言われる人達の中にもいたずらに金日成体制を美化し過ぎる嫌いがある。この阿呆垂れどもを放置すれば、テポドンや不審船、拉致疑惑などの心配を消滅させることは不可能である。

私の教え子である陸軍士官学校第60期生寺前会の諸君のために、昨年は「春秋に義戦なし」^{シュンジュウ ギセン}と「遠交近攻」^{エンコウキンコウ}を書いてみた。本年6月に予定される寺前会のため、何か手土産として配りたいと思案している時、上記事件が毎日の新聞記事を賑わしていた。今までイスラム圏のことは何回か取り上げ、戦闘体験から中国関係はさらに多く記述した。今回は北朝鮮、「金日成世襲王朝」^{ニギ セシュウ}を組上に載せることにした。先ず縁の薄かった朝鮮半島の歴史から書き出し、戦時中の彼の行動を述べ、朝鮮戦争以後の金日成王朝の建設へと進みたい。(平成15年2月1日記)

「朝鮮半島と私」

私が初めて朝鮮半島に渡ったのは昭和13年の暮れであった。赴任する札幌歩兵第25聯隊は北満洲（現中国）のチチハルに駐屯中であり、釜山港（現韓国）から日本が敷設した朝鮮縦断鉄道に乗車し、大邱～大田～京城（以上韓国）～開城～平壤～新義州（以上北朝鮮）を通過し、朝鮮と中国東北部の国境を流れる鴨緑江を渡り、奉天（瀋陽）～新京（長春）を経由して任地のチチハルに到着した。

当時の日本内地の鉄道線路は狭軌鉄道で、朝鮮から大陸の鉄道は広軌（現在の新幹線の幅）であり、ゆったりした車内を羨ましく思ったことを今でも忘れられず、羨望的であった。

満洲に続いて昭和15年、青雲の志を抱いて決死の覚悟で中国戦線に参加した。そして再び

大陸戦線から朝鮮半島を縦断して内地の間を往復すること2回に及んだ。当時としては朝鮮半島を3回も行き来した生存者は少なく、幸いに私は半島の概況は知っている積もりである。

満洲や中国本部の大陸の各地を馳せめぐり転戦しながら、時々、支那人（中国人）と半島の住民を比較対照して眺めることもあった。我々内地の日本人の生活も現在と比較すると雲泥の差で「月とすっぽん」だが、日本の莫大な投資の結果、当時の半島の日本人（現在の韓国・北朝鮮人）の生活程度は支那人と比べると「提灯に釣鐘」であった。大陸に進出していた半島人の事業家は屢々、日本に感謝し、日韓併合は半島人に力が無かったからだと言っていた。敗戦まで同じ日本人であった彼等が戦後になって、戦勝国の人のように振る舞うのは同僚として戦った我々は耐えられない心境である。そして半島は古代から中国の属国だった歴史も緋いて欲しいのである。



『朝鮮半島の歴史の概要』

我々年代の者にとっては朝鮮は日本国の一部であったが、朝鮮半島の地理・歴史を教育された記憶が全くない。ここで改めて学習したい。

「**卓^{リシ}鮮^シの名称**」は、14世紀末から約500年間この地を支配した李氏朝鮮王朝（李朝）によって広まったが、「史記」の箕子（殷末期の朝鮮の王族で朝鮮古代王朝の始祖と伝えられる）のくだりに「朝鮮」の名がみられるように、紀元前に既にこの名があったとされている。例えば「東^{ヨチショウラン}国^{アサヒ}輿^{センメイ}地^{ユライ}勝^{スデ}覧（1481）」は『朝^リ日^{ヨク}が鮮^{セン}明^{ヒツク}なるところ』として朝鮮の由来をあげている。李朝時代の学者「李翼」は朝は東方、鮮は鮮卑族（古代北アジアの遊牧民族の一）の意と解釈した。英語の「Korea」は「高麗」の発音（Koryo）からきたもので、世界にまたがる大帝国を築いた「元」が伝えたものであろう。

「**卓^{ダンクン}鮮^{キシ}の二つの神話**」 朝鮮の開国神話には「檀君神話」と「箕子神話」の二つがある。これらは高麗時代に成立したもので、前者は民間信仰を、後者は儒教を背景にしたものである。「檀君神話」は中国の堯帝即位50年に、天神の子と熊の化身との間に生まれた檀君^{ビョンヤン}が平壤京で建国するが（前2333年が檀君紀元）、1500年後、箕子^{キシ}が朝鮮に封ぜられたので、山神になったという。この神話は北方の熊信仰、南方の聖地信仰などを基礎としたもので、はじめ平壤地方の固有信仰であったが、モンゴル侵略に抵抗した高麗農民が檀君を開国の始祖神として民族的な団結をはかった。朝鮮王朝（李朝）の国号採用に当たっても、箕子朝鮮と並んで檀君朝鮮の朝鮮が有力とされた。19世紀末の民族意識の高揚期に、檀君は再び開国神として信仰され、大倥教や檀君教という新宗教が成立して現在に至っている。

箕子^{キシ}朝鮮は「史記」などによれば、周の武王が殷の王族箕子を華北地方に封じ、朝鮮王としたとされる。前108年に漢の武帝が朝鮮に漢四郡をおいたことから、華北王箕子を朝鮮開国の始祖とする伝説が中国人の間に生まれた。高麗時代に儒教が発展すると、箕子を開国の始祖とする神話が高麗儒者のあいだで生まれた。その後、朝鮮の知識人に支持されたが、自国文化尊重の気運におされ、次第に衰退した。このように西方や北方の勢力を結集したモンゴルの侵略と、これに対抗、あるいは追従するなかで、民族文化を形成していったことが窺うことができるようだ。

「高句麗（朝鮮古代の国名）」（下図参照）

前2世紀のはじめに、中国の燕（戦国七雄の一つで都は現在の北京）が前漢に滅ぼされたとき（前195）、燕から逃れた衛満が中心になって、現在の中国・遼寧省南部から西北朝鮮にかけて国家を作った。これを「衛氏朝鮮」と言い、204年に鴨緑江中流の「集安」に都し、427年に都を現在の平壤に移して、宮廷貴族の連合政体である五部時代を迎えた。（下図参照）

漢の武帝が衛氏朝鮮を滅ぼして楽浪などの四郡を置いた（前108）が、楽浪郡以外はまもなく廃止されたり、遼東地方（現中国領）に引き上げた。しかし四郡の設置はこの地方の国家形成に大きな刺激を与えた。その結果、前37年ころに「高句麗」ができた。「こうらい」「こま」とも呼び、別名を句麗、高麗、貉（ムジナ）、穢貉（異民族名でけがれたムジナ） 貊（猛獣の名）などを書く。

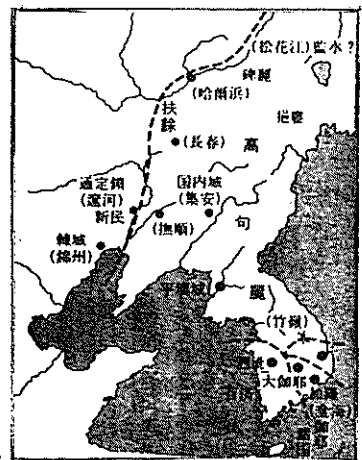
6世紀中葉になると、新羅（シラギ）が急速に領土を拡張し、551年には漢江上流地域を奪い、553年には漢江下流域も支配した。さらに新羅は日本海岸を北上し、高句麗の南境や東辺を脅かした。高句麗は中国の南北両朝に朝貢し、484年には北魏の席次が南朝の齊に次ぐものとなり、中国諸王朝から与えられた称号も、東方諸国中最高位であった。

高句麗は598年から始まった中国の隋王朝からの4回の攻撃（6世紀初めの半島三国の勢力図）

撃を撃退し、645年から始まった唐王朝の5回にわたる攻撃もその都度撃退した。しかし668年に唐・新羅連合軍が高句麗を攻めて王都の平壤を攻略し、高句麗は滅んだ。だが高句麗遺民は高句麗復興運動のなかで、669年に大祚榮が「震国」を建設した。これがのちの「渤海国」である。

7世紀の日本との関係は、前半期には僧侶の渡来による文化交流が主で、中葉以降は外交関係が中心となる。6世紀末以降、

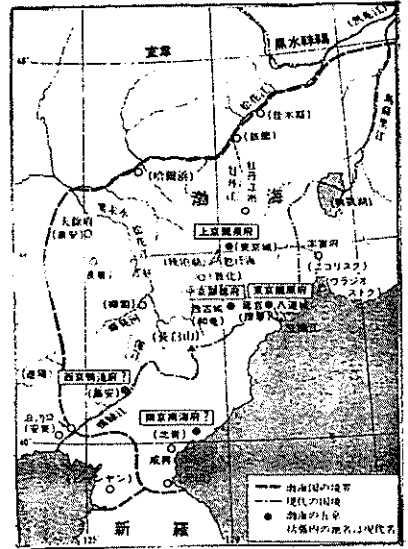
高句麗王朝も百済にならい、大和王朝に儒学者や僧侶を派遣し、次第に緊密になった645年来朝の使者を「高麗神子奉遣之使」と称し、高句麗王を天皇と同様に神の子とみていた。高句麗滅亡後、新羅は亡命した高句麗遺民を7回も日本へ遣使させ、新羅の対日外交を円滑に推進した。



「渤海国」 (渤海国は下図参照)

普通、朝鮮の歴史を論じる時は、高句麗の次に新羅と百済を述べなければならないが、金日成を主体に記述したい拙書は彼に関係の深い「渤海国」を先ず書くことにした。日本では渤海を朝鮮史の外にしているが、北朝鮮や韓国の学会は渤海を朝鮮史の一部と考えており、中国の歴史の中にも渤海として明記されている。この地は又、戦時中は金日成のゲリラ地域でもあった。
(渤海国王都配置図)

7世紀末から10世紀初にかけて、現在の中国東北地方、朝鮮咸鏡道およびソ連邦沿海州にまたがって存在した国家が渤海国である。始祖は「大祚榮」で、高句麗人ともその支配下にいた靺鞨人ともいわれる。住民も主に高句麗人と靺鞨人からなっていた。(靺鞨人とは中国の隋・唐時代に東北地方から朝鮮北部に居住したツングース族の総称)

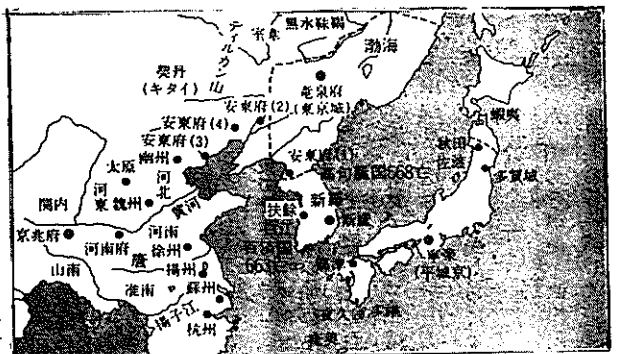


高句麗が668年に唐に滅ばされた後、営州(遼寧省朝陽)に移されていた大祚榮を中心とする高句麗人および靺鞨人らの一派は、契丹人の李尽忠の反乱に乗じて営州を脱出し、現在の中国・吉林省「敦化」を根拠地に建国した。これは698年のことである。当初は震国(振国とも書く)と称していたが、713年に大祚榮が唐から渤海郡王という称号を与えられてより、国名を「渤海」と称するようになった。

(下図は8世紀の東アジア～渤海と新羅を中心の図)

第2代大武芸(在位720～737)の

とき、渤海の北にいた黒水靺鞨と唐との通交を契機に、両者に挟撃されることを恐れた渤海と唐との間で緊張が高まった。このような情勢を背景にして、渤海は日本との連携を求めるようになった。727年を皮



切りに日本へ往来した使節は34回を数えた。日本にとって渤海は唐との通交の中継地の役割を果たし、唐への留学僧が渤海を経由して往来した。王都は上京(現黒竜江省東京城)であった。

渤海史を現在の国境区分にしたがって中国辺境史とする考え方や、女真族（満洲族の一派）との関係から満洲史とする見方には、それぞれ理由がある。しかし朝鮮史の立場からみれば渤海国の成立は、唐に反対する高句麗遺民たちの活動によるものであり、日本との国交でも常に高句麗の後継者であることを主張している。渤海国王から日本の天皇にあてた国書では、自らを高句麗王を称するように、高句麗を継承する意識が強かった。

勿論、高句麗と渤海とは王都の所在地も異にし、構成部族にも北方の靺鞨諸族が加わるなど多少の相違がみられ、時代が異なることなどから、それぞれの文化に若干の相違がみられる。しかし渤海滅亡にあたって多数の貴族や住民が高麗に亡命し、その後の朝鮮文化にかなりの影響を与えている。このようなことから渤海史を取り上げることは、朝鮮史の立場から見れば当然である。

「高麗」（コマとも読む）

918年～1392年間の朝鮮の王朝である。かつて日本では『高句麗』とともに『高麗』を『コマ』と呼んだ。英語の「Korea」は「高麗」の朝鮮語音「コリョ」の訛ったものである。

高麗時代の特色は、第一に朝鮮史上初めて統一国家が出現したことである。後記する新羅時代には、高句麗の後継者である渤海国が北方（中国東北部）にあり、南北に2国家が並立していた。高麗成立の直後に渤海が契丹に滅ばされ（926）、多数の遺民が高麗に移ってきた。

第2は強い外圧を受ける中で国家を建設し維持したことである。10～14世紀はアジア大陸で契丹（遼）・女真（金）・モンゴル（元）などの北方民族が雄飛した時代で、高麗はそれらの外圧に苦しめられた。特にモンゴルの侵入と支配は大変な苦難をもたらした。しかし高麗は抵抗の末に外圧を退けた。

第3は血統による身分差を超え、才能のあるものが立身出世する道が開かれたことである。新羅末の内乱期に実力のあるものが勝ち、新羅の骨品制は崩れた（骨品制とは古代朝鮮・新羅の社会制度で、出身氏族により五段階に身分を区分し、これによって位階・官職・生活様式などが制限された）。そのあと高麗は科举制を採用し広く人材を求め、まだ血統による社会的制約は残ったが、その解消に向かって一歩前進した。

高麗王朝をおこした「王建」は松岳（開城）地方の豪族で、初めは弓裔の武將として活躍した

が、やがて弓裔^{キウエイ}を倒して王となり、高句麗^{コウクリ}の後継者であることを自任して国を「高麗」と号して
 (918)、翌年、松岳^{ショウガク ケソン}(開城)を都とした。当時、新羅^{シンラ}は慶州^{ケイシュウ}周辺で余命を保ただけであり、
 南西部は後百済^{ゴクダラ}が支配し、また諸方に豪族^{カッキョ}が割拠していた。やがて新羅は自立できないことを知り
 高麗^{コマ}に降伏してきた(935)。翌年、王建^{コウフク}は後百済^{オウケン}を討ち滅ぼした。そのころ北方では渤海^{ボツカイ}
 が滅び多数の遺民が高麗に移ってきた。こうして高麗は渤海遺民をも含めて朝鮮民族を統一した。

以上のように前期は文民が圧倒的に優位を占め武臣は軽蔑されていたが、中期の1170年、
 続いて73年のクーデタで武臣は文臣を殺害追放し、武人政権^{ジュリツ}を樹立した。これから約100年
 、朝鮮史では類のない武人政権の時代が続いた。しかし1231年からモンゴルの侵入が始まり、
 高麗^{コウライ}は頑強に抵抗したが、モンゴルと結ぶ国王派にたおされ武人政権は消滅した(1270)。

後期は元の制圧下では高麗王室と元室との一体化が進んだ。歴代の王は元の皇女を王妃にむか
 え、その間に生まれた男子が王となり、国王の地位は元の力によって保証された。しかし東北部
 の領土は元に奪われ、元の2回にわたる日本遠征には兵士や兵船、食料、武器などを徴発された。
 こうして元の力を背景にして高麗政界では親元派がはびこった。

そのころアジアの政局は大きく転換しつつあった。元の支配下の中国では14世紀中期から反
 元運動^{ゲン}が起り、元の威信はゆらぎ出した。それを見て恭愍王^{キョウビンオウ}は新興官僚の支持の下に1356
 年、反元運動^{ハンゲン}を起こし、親元派の追放、元の年号の使用停止、総督府の奪回、農荘の没収などを
 断行した。このころから中国本部では、明を生み出す農民運動の「紅巾の乱」が半島にも侵入し
 (1359年と61年)、また倭寇^{ワコウ}の襲来が激化した。高麗は室町幕府に禁圧を求める一方、防
 備を固めて反撃し、又、倭寇の根拠地の対馬^{ツシマ}を討った(1389)。

一方、中国では明が成立し(1368)、元は北方に退いて再起をはかった。この情勢は高麗
 に深刻な影響を及ぼし、親明派と親元派の対立が激化した。結局、親元派が勝ち、元を助けるた
 めに明を攻めることになった(1388)。その遠征軍の指揮官は倭寇を討って名声をあげてい
 た「李成桂^{リセイケイ}」が任命された。しかし彼は鴨緑江の中洲まで行って軍を引き返し、都に戻って親元
 派を追放し、一挙に政治の実権を入手した。続いて政治改革を断行し、1392年、彼は王位に
 つき、高麗王朝を倒して『李氏朝鮮王朝(李朝)』を創建、国号を朝鮮、都を漢城^{ソウル}とした。

「百 濟」

表題のようにこの拙文は「金日成」を書くことが主目的である。彼の生まれ故郷は北朝鮮であり、活躍したと伝えられる地域もまた朝鮮北部と満洲（中国東北部）である関係から、朝鮮半島の歴史も時代を度外視して、まず朝鮮北部（満洲を含む）に建国した「高句麗」「渤海」「高麗」を記述した。これから半島南部に建国した「百濟」や「新羅」について書くことにする。

（四世紀末の朝鮮半島）

「百濟」は朝鮮古代の国名で四世紀前半～660年に及ぶ。

「ひゃくさい」と音読するのが一般的であるが、日本では大村などを意味する朝鮮の古語を訓読して「クダラ」と呼びならわしている。

百濟の建国者は始祖神話などから夫余・高句麗系の移住民とされている。初期の百濟の領域は漢江流域で、この地

域は南方の韓族系文化と北方の高句麗文化の共存地域であり、

そのことが百濟史の特徴にもなっている。また中国大陆の魏・

晋の帯方郡の勢力下にあつて、主として文化的・経済的な面で

発展した。314年に高句麗とともに帯方郡を滅ぼすと、近隣

の諸国と連合して百濟国を建設した。この漢江下流域は三国時代を通じて争奪の地となった。

国際面では東方の強国高句麗と対立し、371年には平壤城を攻め落とし、この戦勝によって

百濟の国際的地位が飛躍的に向上し、翌年をはじめて中国の東晋に朝貢した。歴代の百濟王は北朝

の秦や南朝の宋・南齊などに朝貢し、その称号も累進して「特使節都百濟諸軍事鎮東大將軍百濟

王」となった。

日本書紀引用の百濟記によれば、大和王朝は366年に「加羅諸国」と、翌年には百濟と国交

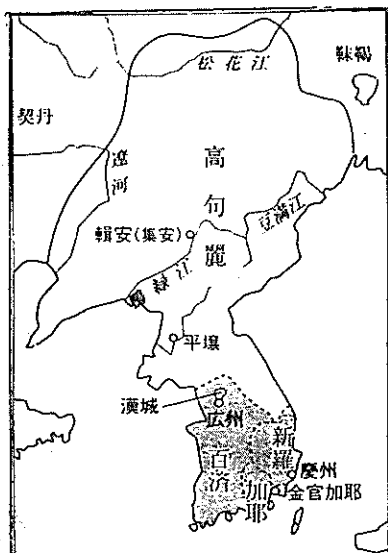
を開いた。さらに369年から485年までに、大和王朝は5回も出兵して新羅や百濟を討伐し

たとしている。しかしこれらの伝承記事は、6世紀中葉の事情をもとに年代を遡及させた記事で、

8世紀初頭につくられたものとみられる。また百濟が倭と結んで396年以降、5度にわたって

高句麗と戦ったことは、広開土王碑文にもみられる。これらの倭国を、日本の学会では日本書紀

に従って大和王朝にあてるものが多いが、百濟側資料によれば大和王朝との国交は6世紀である。

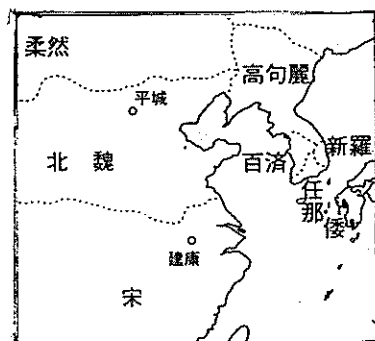


倭^ワと同盟関係を結ぶとともに百済王^{クダラ ヨウリツ}を擁立した理由は、この地方^{コウクリ}の小国を統合して高句麗に対抗するとともに、前代に築いた百済の国際的地位を利用して、中国文化の導入を図ろうとしたことにある。また国際関係では新羅と国交を開き、高句麗の南下^{ソシ}を阻止しようとした。この時期から本格的な三国時代となり、現在の忠清北道を中心に三国の攻防がつづいた。

(4世紀の東アジア地図)

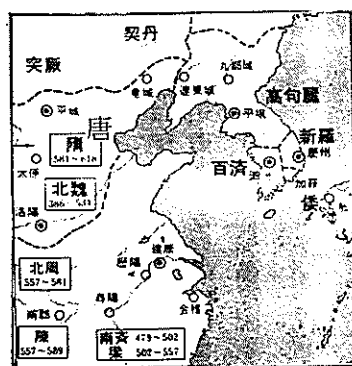


(5世紀の東アジア地図)



百済は大和王朝の外交的・軍事的支援を求めるため、513年から五経博士などを派遣して、百済の儒教文化を組織的に提供^{ヒャクサイ ジュキョウ}した。538年には高句麗・新羅連合軍と対抗するため、大和王朝に仏教を供与^{キョウヨ}して救援軍の派遣を要請した。大和王朝は百済からの新文物にひかれ、外交上のみならず軍事的にも百済を支援することになるが、その軍勢力は三国抗争に影響をあたえるほどのものではなかった。

(6世紀の東アジア地図)



538年に王都を泗沘^{シヒ}（現在の忠清南道の扶余）へ移した。泗沘は水陸交通の要衝で西海岸地域を支配し、加羅諸国、中国の南梁、大和王朝などと積極的な外交交渉を進めるのに格好の地であった。552年に百済は漢江下流域を回復したが、翌年にはこの地を新羅に奪われ、王は戦場で戦死している。

唐代になると、百済の僧侶や儒学生などが大量に唐に留学した。

このような平和な国際関係の裏で、唐は朝鮮支配の準備を着々と進めていた。戦時体制を整

えた百済は、642年に新羅を攻め、洛東江中流域の40余城や同流域の中心地を奪い、唐への要衝地点を襲撃し、645年には唐の第一回高句麗侵略戦争に便乗して、百済は新羅王都近郊まで軍隊を進めた。その後、三国末期まで激しい戦闘が続くが、660年、突然唐が戦略を改め、新羅と同盟して百済を攻撃した。百済は準備不足のため戦線の整備もできないまま、わずか10日間の戦闘で降伏した。631年から大和王朝の人質となっていた王子を擁立し、高句麗や日本の支援を受けて、新羅・唐連合軍と戦った。

要衝地点を襲撃し、645年には唐の第一回高句麗侵略戦争に便乗して、百済は新羅王都近郊まで軍隊を進めた。その後、三国末期まで激しい戦闘が続くが、660年、突然唐が戦略を改め、新羅と同盟して百済を攻撃した。百済は準備不足のため戦線の整備もできないまま、わずか10日間の戦闘で降伏した。631年から大和王朝の人質となっていた王子を擁立し、高句麗や日本の支援を受けて、新羅・唐連合軍と戦った。

で軍隊を進めた。その後、三国末期まで激しい戦闘が続くが、660年、突然唐が戦略を改め、新羅と同盟して百済を攻撃した。百済は準備不足のため戦線の整備もできないまま、わずか10日間の戦闘で降伏した。631年から大和王朝の人質となっていた王子を擁立し、高句麗や日本の支援を受けて、新羅・唐連合軍と戦った。

新羅と同盟して百済を攻撃した。百済は準備不足のため戦線の整備もできないまま、わずか10日間の戦闘で降伏した。631年から大和王朝の人質となっていた王子を擁立し、高句麗や日本の支援を受けて、新羅・唐連合軍と戦った。

日間の戦闘で降伏した。631年から大和王朝の人質となっていた王子を擁立し、高句麗や日本の支援を受けて、新羅・唐連合軍と戦った。

の支援を受けて、新羅・唐連合軍と戦った。

663年に百済の復興軍を支援するため大和王朝は初めて大軍を朝鮮半島に送ったが、^{ハクスキノエ}白村江の戦いで敗れた（細部は^{シラギ}新羅の項で記述する）。この前後に百済からの亡命貴族多数が日本に渡来し、その後各方面で活躍した（帰化人）。そのうちには、^{クダラオウ}百済王一族のように、8世紀末に、^{カンム}桓武、^{サガ}嵯峨、^{ジンメイ}仁明など諸天皇と姻戚関係を結ぶようになったものもある。^{カンム}桓武の生母の高野新笠は^{ブネイオウ}百済武寧王の子孫と称する和氏の出で、天皇は「^{クダラオウ}百済王らは朕の^{チン}外戚なり」といい優遇した。

百済は中国王朝との国交で受容した^{ジュキョウ}儒教や仏教の文化を、国交を通じて日本の貴族層に伝えた。4世紀中葉に百済で文字が使われ始めると、369年には銘文をもった七支刀が倭王に贈られ、^{アチキ}阿直岐や^{ワニ}王仁が漢字や漢学を伝え、仏像や仏教經典を伝えたとされている。

^{クダラ}百済文化の日本の古代文化に与えた影響はきわめて大きかった。例えば、「日本書紀」の年次構成で、556年以前は百済の史料（^{クダラ}百済記・百済新撰・百済本記）によって作られることになった。また寺院建築、仏像彫刻など、^{アスカ}飛鳥・^{ハクホウ}白鳳時代の美術・工芸をはじめ、百済楽など音楽、舞蹈などにも大きな影響を与えた。また朝鮮式「山城」といわれる古代の城郭も、^{サンジョウ}百済からの亡命貴族の指導によるものである。

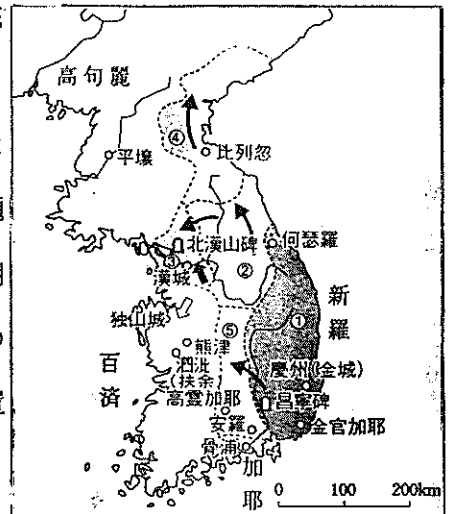
「^シ新^ラ羅^ギ」

古代朝鮮の国名。356～935年に及ぶ。「しんら」「しら」と発音するのが一般的であるが、日本では城の意味を語尾に付して、「しらぎ」と呼びならわしている。^{シラギ}新羅の建国年次は、中国の文献では、^{シンカン}辰韓の^シ斯盧国から^{シラギ}新羅に変わり、^{キョング}慶州で高塚墳が盛行する4世紀後半と見、^{ナモツ}三国史記によって奈勿王の即位の年をあてた。一般には、三国時代（356～676）と統一新羅時代（677～935）に大きく二分するのが普通である。

^{シロ}斯盧国から^{シンラ}新羅国への改称は、国の内外での発展によるものである。奈勿王以降は金氏が王位を独占したと伝えられ、新羅も歴史時代に入った。新羅は377、382両年に辰韓諸国（^{シンカン}朝鮮半島南部にあった多くの小国）の代表として、^{ゼンシン}前秦に^{チョウコウ}朝貢した。399年、倭軍に王都を占領され、翌年高句麗の援軍に一時救われるが、再び倭軍や高句麗軍に王都を占領されて苦難の時代が続いた。新羅史料や南北朝以前の中国史料にみえる「倭」は、北九州および「^ワ加羅諸国」の別称とみられる。^{キンカンカラ}加羅諸国とは4～6世紀に半島南部にあった小国群で、^{ダイカラ}金官加羅・^リ大加羅等を指す。

朝鮮の三国間の抗争に小康状態が続く間に、隋・唐の統

一家が中国に生まれ、朝鮮にも統一の気運が生れた。隋・唐との関係は良好であったが重視されず、日本との関係は三国中では最も頻繁に使節を派遣していた。この外交問題は主として「任那」問題であった。「任那」とは古代・朝鮮南部にあった加羅諸国の地域で、4世紀後半頃から倭の勢力が及び、日本書紀によれば統治機関である日本府が置かれたという。6世紀頃までに新羅・百済に併合された。

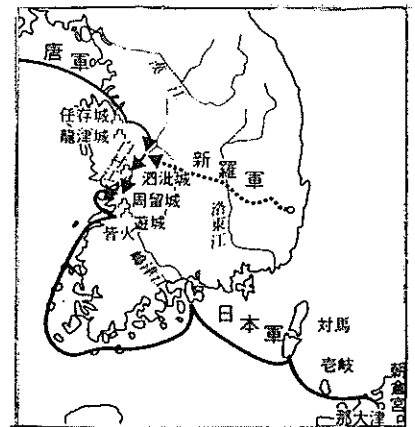


①は550年ごろの新羅の領土。②は551年ごろ、③は553年ごろ、④は560年ごろ、⑤は562年ごろに新羅が獲得した土地。→は高句麗の南下、⇨は百済の反撃、⇩は新羅の勢力拡大をしめしている。

新羅の統一戦争期は643年に新羅が唐に救援を求めた時から始まる。660年に唐との軍事同盟がようやく成立し、唐軍と連合して百済を滅ぼした。しかし日本から帰国した扶余の王子・豊璋や王族たちが、各地で百済復興軍を起し、一時優勢であったが、663年、「白村江」の戦いで敗退した。

(白村江の戦いの進行図)

新羅と唐の連合に危機感を抱いた百済と高句麗は655年に連合して新羅の北境に大攻勢をかけた。これに対し、新羅は唐に援軍を求めた。このとき以後、唐、新羅の連合はいく度にもわたって高句麗軍に痛手をあたえた。新羅は、さらにその機会をとらえ、唐に百済遠征を求めた。



これによって660年に唐・新羅の連合軍5万が百済に侵入し、一挙に都の泗沘(扶余)を落とした。このあと、百済

の各地で祖国復興運動が起こった。人質として日本に赴いていた王子の豊璋を百済の王位につけようとして計画した。求めに応じて百済に赴いた日本の水軍は、663年に白村江で唐・新羅の連合軍に大敗した。これにより百済の復興の計画は失敗に終わった。豊璋と彼に従う百済の貴族は、このあと日本に亡命した。百済王家は百済王の姓を天皇から与えられ、日本の貴族として扱われた。唐軍は百済滅亡の直後、35万の軍勢で高句麗の都、平壤を攻撃したが失敗し、666年に起こった高句麗の内紛につけ込んで一気に平壤を落とし、668年に高句麗は滅亡したのである。

「三卓章とほ」

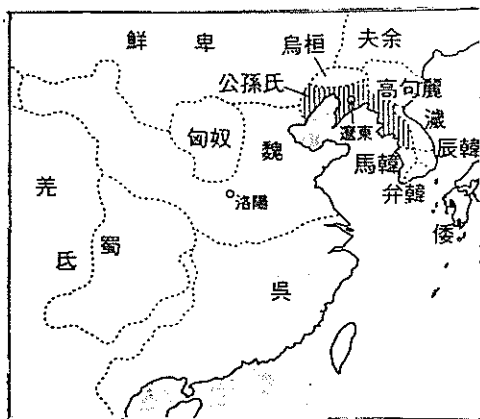
古代朝鮮の南部に割拠した韓族の総称で、転じて朝鮮民族一般をさす場合に用いる。古代朝鮮の北西部には「衛氏朝鮮」(5頁参照)と称する国家が存在したが、前2世紀の末ころ漢の武帝(漢の東方経営図)によって征服され、郡県支配の中に編入された。これに反し半島南部の方面にはその統制も十分に行きわたらず、この地域の韓族は各地に分裂割拠し、楽浪、帯方の太守を介して一種の間接支配下にあったようである。



三国志・魏志の東夷伝はこれら韓族について、最も古くかつ詳細な記録であるが、それによると彼らは3種に分かれ、西方に「馬韓」50余国、東方に「辰韓」12国、辰韓に雑居して「弁辰」12国があったとしようが、これらの国の実体も国数も極めて曖昧である。三国志・魏志東夷伝の記述では、これら3種を統合する君主というべき者は存在せず、各部族は雑居しており、特に弁辰(弁韓)と辰韓の区別は不明である。また3種と表記しているが、この3種も言語・習俗は明確な基準によった分類ではない。

(2世紀末のアジア地図)

「後漢書」の韓伝は、韓には馬韓、辰韓、弁韓の3種があると記している。弁辰は弁韓と呼ばれる場合もある。この韓は楽浪郡と倭の間にあり、辰韓と馬韓とは言葉も異なり、辰韓と弁辰の言葉や習俗はよく似ているとも記されている。



韓国の人々の言い伝えでは、衛氏朝鮮が立っていたころの馬韓に三韓全体を支配する辰王がいたという。

そして、後漢代の頃まで、辰王の子孫にあたる者が韓を代表して楽浪郡との交渉に当たっていた。

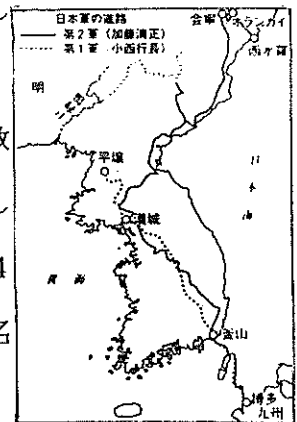
そのころ馬韓は54の小国に分かれていたが、辰王はこの中の月支(ウオルチ)国にいた。そして辰韓には12、弁辰にも12の小国があったという。こういった記事から、1、2世紀の韓は小国が分立する状況にあったが、そこを代表して外交に当たる名目的な君主が立てられていたことがわかる。これは、2世紀末ころ倭国の30の小国が、邪馬台国の女王・卑弥呼の指導のもとにまとまった段階と類似している。(三国志・魏志倭人伝)

「^{リ シ チョウ セン}李氏朝鮮」 (8頁に続く)

中国は1368年に元朝から明朝へと政権が交代した。高麗では倭寇の防衛で活躍した大將軍
^{リセイケイ シンミン トナ シンダン オ ミヤコ コウライ ニギ}李成桂は親明を唱えて親元派の貴族を追い、都を制圧して高麗の実権を握った。1392年には
^{キョウジョウオウ}高麗の恭讓王を迫って新王朝を樹立した。これが500年余もつづく李氏朝鮮の起こりである。
^{セインウ リョウイキ オウリョクコウ トマンコウ}そして李朝が成立して間もない世宗の時代(1418~50)に、韓国の領域は鴨緑江と豆満江
^{カクチャウ オ セインウ ヒョウオン}にまで拡張して朝鮮半島全体を押さえた。又、世宗は韓国独特の表音文字のハングル文字も作っ
 た。李朝が成立した時には日本では南北朝が合一し、新たな日韓の歴史が始まった。

^{ムロマチ}日本は室町幕府の勢力後退によって乱世の時期を迎えたところ、李朝朝鮮は繁栄と平和が続いて
^{ワコウ カッパツ ハンカン シンミツ クズ}いた。しかし倭寇の活動が活発で日本に対する反感が急速に高まり、親密な関係は崩れていった。
^{セインウ}世宗のあと世祖、成宗の名君が国力を充実させたが、16世紀の末期になると李朝は果てしな
^{ハバツトウソウ ク カエ トヨトミヒデヨシ}い派閥闘争を繰り返すようになった。日本では長期の戦国争乱が終わりに近づき、豊臣秀吉が天
^{ニンシキ ミン セイフク クリダ}下を統一した。しかし秀吉の国際認識の不足から明国の征服を企て、李氏朝鮮が秀吉の意思に従
^{ブンロク}う意思を明らかにしないので、文祿元年(1592)に15万余りの大軍を朝鮮半島に攻め入ら
 せ、朝鮮北端まで侵入した。秀吉は外国の地での戦闘の困難さを理解し、
 (文祿の役の図)

^{フアンタイ ケイケン ヒロウコンバイ}ておらず、地理不案内と初めて経験するゲノラ戦で疲労困憊となった。
^{カ リンシュン}まもなく明朝の援軍が駆けつけ、秀吉の水軍は李朝の李舜臣の水軍に敗
^{ホキョウ キツ ツギ コウショウ}れ、日本軍は補給が困難を極めて軍を引き和議の交渉に入った。しかし
^{オコ ケイチャウ}秀吉は明の使者の出した条件を怒り、慶長2年(1597)に再び14
^{サ ム}万余の軍勢を李朝に差し向けた。しかし秀吉の死亡により日本の諸大名
^{スイタイ}は引き上げた。この事件をきっかけに李朝の衰退は加速している。



^{イチジル}日本は江戸から明治と移り変わり、西欧勢力のアジア進出は著しく、韓国も国際社会に引きず
^{ニッシン ニチロ ショウリョク}り出された。それから起こった日清戦争や日露戦争は我々は知り尽くしている関係から省略する。

^{ダイカンテイコク}李朝は1897年に国号を朝鮮国から「大韓帝国」に改めた。日本は米英の支持を受けてポーツ
^{モ コ}マス条約の中に、日本の韓国に対する指導・監督権を盛り込ませ、これによって韓民族の独立が
^{ウバ}奪われることが確立し、明治43年(1910)、「韓国合併に関する条約」が正式に結ばれた。

「私の朝鮮半島観見」

私の陸軍士官学校予科時代の教授部長は、最後の朝鮮国王として日本の皇族に列せられた陸軍
歩兵大佐「李王垠」殿下であった。又、同期生に姜錫功という北朝鮮出身者がおり、朝鮮人に好
奇心と親しみを感じていた。しかし我々年代の者は古代からの朝鮮輕蔑の歴史観を持っていたこ
とは間違いない。明治以降の日本は日清・日露戦争の大勝利で世界五大強国に列し、日韓併合と
なったからか、前近代に見られる平和的、友好的な日朝関係や日本が朝鮮から受けた恩恵を無視
し、伝説に過ぎない「神功皇后の三韓征伐」や、侵略である倭寇、豊臣秀吉の朝鮮征伐が、日本
の海外雄飛の例として小学校で教育され、朝鮮蔑視の観念が更に醸成されていたようである。

敗戦により朝鮮半島が南北に分断されたことは、ビルマの激戦地で終戦を迎えた私等は聳座敷で
全く知らなかったばかりか、朝鮮出身者が兵隊になっていることさえも集結地で初めて知ったの
であった。そして本当に南北分断を肌で感じたのは朝鮮戦争である。戦争の軍需成金から日本の
経済が発展するにつれて「日韓合併」が大きく問題になり、今日に至っている。

歴史的に観察すると、日本に危機を齎した原因は常に朝鮮半島で、朝鮮の内紛が外国勢力を引
き込んでいる。そのため南北ともに植民地支配を以て日本叩きをしているのが現状である。

私は戦時中に朝鮮半島と中国大陆の間を3回も往復した。そして各戦線を馳駆しながら両民族
の生活状態も直視してきたから、朝鮮・中国のことはある程度は知っている積もりである。

日本の朝鮮統治時代を回顧すると、鴨緑江上流に東洋一の発電所を建設して産業を興し、南鮮
には水利を整備して米の増産を図り、陸海の交通施設も完備させた他、学校教育の充実など枚挙
に遑がない。現在の韓国の発展の基盤は植民地時代からの投資の蓄積である。台湾はその点に感
謝しているではないか。北朝鮮について言えば、現在の金正日体制と日本の植民地時代の生活と
比較して、どちらの生活が幸せだろうか。数百万の餓死者を出したのは金正日である。

韓国も北朝鮮も戦勝国ではない。李氏朝鮮の末期は崩壊寸前の状態であり、まさに生き地獄の
状態だったことを忘れないで欲しい。我々日本人も敗戦して占領下の苦しみを味わい、その上、
憲法まで押しつけられたのである。36年間、同じ国民であったことを歴史的に理解し合って、
もう「遠交近攻」策は止めようではないか。

キム イル ジョン

『金日成』

「金日成の生い立ち」(下図参照)

キムイルジョン

金日成は1912年4月15日(大正元年)の生まれで我々大正一桁生まれの者たちと同年代

ヒトケタ

である。彼の育った家は平安南道大同郡古平面南里で、現在は万景台と呼ばれる地に今も残って

マンギョンデ

ピョンヤン マンギョンデ

いる(平壤市万景台区域)。本名は「金成柱」である。

キムヒョングク

父「金享稷」は、この地に代々暮らしてきた農民の子で、母「康盤石」は隣合う龍山面下里七

カンバンソク

トナリア

カントンコウ

イツ

谷に住む下里教会長老の康敦煌の娘であった。両親が結婚したのは何時のことか定かでないが、

キムヒョングク ピョンヤン

結婚後の1911年、金享稷は平壤にあるイエス長老派系の崇実中学校に入学したのであり、金

カンバンソク

日成が生まれた時は2年生であった。教会の長老の娘である康盤石がキリスト教徒であったこと

キムヒョングク

は自明のことだが、この娘を妻にして有数のミッション・スクールへ入学した金享稷も、キリス

ト教徒であった可能性が高い。

平壤府を中心とする大同郡はキリスト教の影響が強く、郡内に40の教会を数えた。古平面南

キムヒョングク

ムスメムコ ショウカイ

里教会の金牧師が、自分の教会員の金享稷青年を教会の長老の娘婿を紹介したと考えることは自然

である。金日成は両親とともにキリスト教徒の家庭に生まれたと見てよいだろう。そのキリス

ト教は、多分に朝鮮民衆の中にあるシャーマニズムの要素や伝統思想と結びついたメシア待望を

色濃く持つものであったことだろう。(メシアはキリスト教で救世主としてのイエスに用いる)

キムヒョングク

イキドオ

父金享稷は民族主義的精神の強い人物であり、1910年(明治43)の日韓併合に強い憤り

コウユメン

を抱いた。崇実中学校を終えて書堂(私塾)の教師となった彼が、江東郡古邑面の書堂で教えて

いた1917年3月、彼は秘密政治結社の朝鮮国民会の結成に加わり会員総数は25名であった。

実は1897年に平壤の各教会の経営で設立された崇実学校は、1907年に大学部を併設に

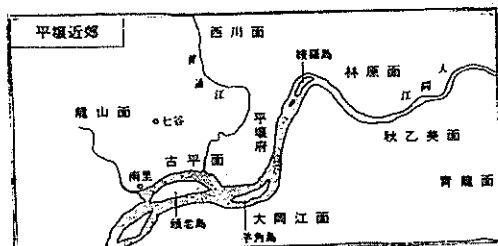
いたり、従来の学校は中学部となった。この大学部はその年、第一回の卒業生を送り出した平壤

神学校とともに、全朝鮮の唯一の高等教育機関として

高い権威を持つに至った。これらの学校に集まる学

生の中から同志が募られたのは自然であった。

1917年3月、まず9名が集まり会が発足した。



この会の目的は、将来日本が欧米と覇を争って衝突する機会に乗じて韓国の独立自治を目ざすため、「同志の結束を図りその準備を為さんとする」ところにあった。徹底的に秘密を守る結びつきを作ろうとして、6月には金享稷は指を切り「大韓独立」という血書にしるした。「豚の足」という暗号で呼ばれた拳銃の入手も熱心に試みられた。

1918年2月、この秘密結社は当局に発覚し一挙に検挙された。金享稷も逮捕されて刑に服したが、その年のうちに釈放されている。翌年3月にはまた独立運動が起こった。その時すでに金享稷は満洲（中国東北部）に赴いており、その後は妻子を連れて満洲に移り住むようになった。そして金享稷は民族主義者に徹したようである。

満洲では金享稷一家は鴨緑江の対岸に住んでいた。金成柱（金日成の本名）少年は父のもとで、はじめは満洲の小学校に学んだが、民族教育を受けさせたいとの両親の願いから母の実家に預けられ、彰徳学校で学んだ。彰徳学校は1909年に下里教会が開いた男女共学の小学校である。このような私立学校は少なくなかった。祖父の康敦煌はこの学校の校監をつとめ、バイブルと漢文クラスを受け持っていた。彼の長男で金成柱少年の叔父にあたる康晋錫も民族主義者で、国を離れなければならない活動家でもあった。

両親のもとを離れ、母方の祖父の学校でキリスト教的、民族主義的教育を受け、祖父とともに教会で礼拝していたことは、この少年の民族主義的な思想形成に大きな影響を残したと思われる。彼がここで教育を受けた期間は今日の北朝鮮の伝記では、1923年～25年（大正14）にかけての2年間である。11才から13才になる間であった。

満洲に戻った金成柱（金日成の本名）は両親が移っていた撫松（次頁地図参照）で、小学校の最後の一年を終えたといわれている。父金享稷は撫松の漢人資産家・張萬成の援助で医院の看板を掲げていた。金成柱は撫松第一小学校でこの張萬成の息子・張蔚華と知り合いになり、友情が結ばれ、張蔚華は漢語の先生になってくれた。

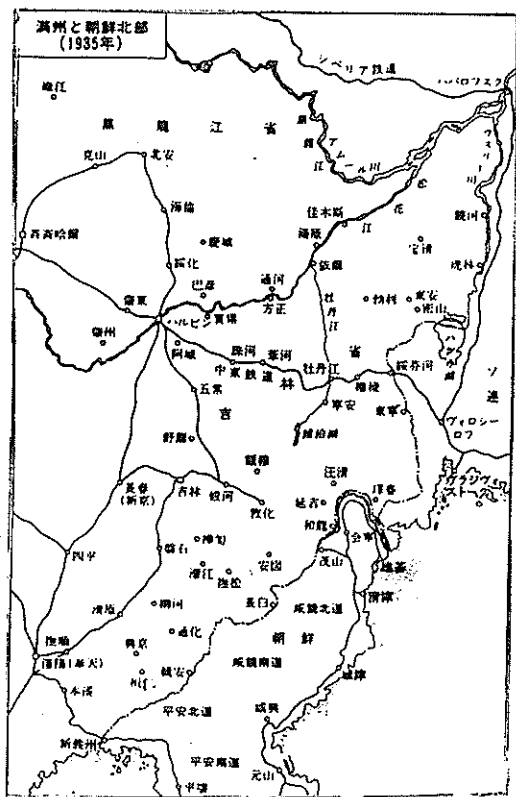
1926年（昭和元年）、金成柱少年の身の上に大きな変化が起こった。この年、彼は小学校を卒業し、3月に民族主義団体正義府の学校・華成義塾に入った。しかしこの年に父金享稷が急死した。そこで母の決断と彼の希望で吉林の中学校へ留学することになった。吉林行きは父が残

した蓄えがあったことと、しっかり教育を受けさせたいという母の考えが影響していたのであろう。そして金成柱少年自身も華成義塾の勉強に飽き足らないものを感じていたことは確かである。

「金日成の吉林留学」

吉林省の吉林の当時の人口は20万ほどの松花江沿いの古都で、省内40万人の朝鮮人たちの夢の都で文化の中心であった。1929年(昭4)当時の1万8千人の吉林管内の朝鮮人の人口は殆どが農民で地方部落に住み、吉林城内に居住する朝鮮人は僅か294人に過ぎなかった。省立第五中学や私立の文光中学など市内の中学校に学ぶ朝鮮人の学生数も推定で20人内外で、吉林大学に在学するものは2

(下図は満洲(東北部)と朝鮮北部)



～3名という程度であった。その殆どが金日柱(金日成の本名)と同じく地方からの留学生であった。日本の内地でも我々が当時体験した昭和の大恐慌時代(不況)で、小学校6年卒業と同時に就職する少年もあり、多くの者は小学校に併設した高等科(2年間)に進学した。まして中学校(旧制5年)に進学できる者は裕福な家庭の者だけで、金日成の家庭は裕福であったようである。

1927年(昭2)に彼が入学したのは吉林毓文中学(毓は養う意)という私立中学である。これは中国人のための学校だから、金成柱少年にとっては最初は勉強が大変だったことだろう。学校のかたわら彼は朝鮮少年会に入って活動したり、さらに留吉林校友会にも出入りしていた。これらは大学生が牛耳っている組織で、彼らは少年会の世話もしていた。

1929年(昭4)秋、吉林から敦化を通して朝鮮の会寧までの鉄道を、日本が敷設する計画が進められていた。この建設を日本の満洲への野望だと見た人々は強力な反対運動を起こした。市内の学生34名が「打倒帝国主義」などのスローガンを掲げてデモを開始した。これは基本的には中国人学生の運動であったが、金日柱などの朝鮮人生徒も参加したのではないだろうか。

「満洲の朝鮮人社会の政治状況」

キツリン

吉林は満洲における朝鮮民族運動の最大の中心地であった。1928年から29年（昭3～

ウズマキ

4）にかけて、朝鮮民族主義運動は激しく渦巻はじめていた。朝鮮における共産主義者と民族

ガッサク

ツイキョウ

主義者の合作は満洲でも追求され、満洲では民族主義者と共産主義者の中のML派が、主導権を

メツ

巡って対立していくことになった。在満の朝鮮人共産主義者にとって、中国共産党に入党してゆ

センタクシ

フジョウ

ゼツエン

く道も現実の選択肢として浮上した。この道は民族運動、民族主義者との絶縁の道であった。

カンケン

金日柱（金日成）が日本の官憲の資料に登場してくる最初は、まさにこの時点で、1929年

5月（昭4）のことであった。しかし金日柱少年は年少の下位のメンバーとして登場しただけで

タイホ

キツリンカンゴク

トウゴク

あった。金日成の公式伝記には、1929年秋に逮捕され、30年5月まで吉林監獄に投獄され

ワカ

ツゴウ

たという記事が見られるが、真実のほどは解らず、普通は自分に都合の良いように書いている。

ウツク

1929年12月、満洲における朝鮮共産党を再建しようとする訴えがあった。これに対しM

トウソウ

カカ

L派は満洲で土地改革をやり武装闘争を進めるべきだと主張した。火曜派は反日の旗を掲げ中朝

農民を団結させるべきだと言い、他の一派は満洲での朝鮮共産党の再建には反対するが、中共に

ケンシン

ノ

加入して中国革命に献身しようと述べるなど、混乱していた。このとき中国革命に参加してきた

カンナイ

ニギ

朝鮮人中共黨員が関内（中国本部）からやってきて、ML派の実権を握った。このことは派を挙

ア

げて中国共産党へ加入する路線が確定するということであろう。

「金日柱少年の放浪」

キツリン

1946年（昭21）にソウルで刊行された「海外朝鮮革命運動小史」に吉林を離れた金日柱

キツリン

ユウ

（金日成）の記述がある。「1926年、金日柱は吉林で少年運動の指導者の一人として1年有

ヨ シンケツ ソソ

メバ

ジュンシン

クモン

ハドウ

余の時日に心血を注いできた。社会的意識が芽生え始めた金日柱の純真な心理には苦悶の波動が

ソクシン

バリキ

起こった。・・・すべての民族主義運動団体は単一戦線結成の促進に馬力を加え、理論的対立は

この戦線の結成に発展を意味した。他方、社会主義運動もそれぞれの会派が台頭した。少年金日

タイトウ

柱の頭は、いや学生金日成（金日柱は本名）の意識はこの二つの社会的傾向から批判を要するよ

ヒハン

うになり、自己の独自の発展があることによって将来の目的達成を期し得ることを悟った。そこ

キ

ウ

サト

で金日成は卒業期を目前にした第五中学の校門も少年探検隊の地位も捨て、単身放浪の旅に出た」

キムジョンイル

で金日成は卒業期を目前にした第五中学の校門も少年探検隊の地位も捨て、単身放浪の旅に出た」

「中国・朝鮮共産党の合流」

朝鮮人運動団体の間の闘争は混乱状態を呈し、一層深刻化していった。朝鮮人農民総同盟の人選の場も喧喧諤諤であった。注目すべきは地方支部同盟組織委員6名が新たに選出される中に、^{ケンケンガクガク}樺松、^{ブシヨウ}安図地方（18頁地図参照）担当として^{タントウ}金成柱の名が挙げられたことだ。18才になろうとする金成柱が、執行委員と同格に並べられる地位にまで注目される存在になってきたことである。

しかし当時のコミンテルンは一國一黨主義で、満洲を含む中国で朝鮮人共産党は作れなかった。在満朝鮮人共産主義者たちは、不満と疑問を胸のうちに押さえながら、中国革命を活動の第一目的とし、朝鮮独立と開放の闘いを放棄させられ、中国共産党に入党したのは1931年（昭6）であり、金日成も中国共産党に入党した。この時の吉林省委書記は将来、蘆溝橋で日中両軍に発砲して戦争に突入させ、中国共産党首席にまで栄進した「^{リュウショウキ}劉少奇」であった。

朝鮮共産党解散までの紆余曲折は省略する。中朝の共産党合流以後は、金日成の活動は中共党とともにあった。「東北抗日連軍史資料」下巻に掲載されている「第一路軍略史」は、1942年（昭17）に金日成自身が書いたものだが、そこには朝鮮人共産主義者たちの派閥闘争を糾弾し、その障害を除き解決したとして、中共とコミンテルンの決定を評価している。そして金日成は、中共の方針に従って満洲で大衆組織を作り、「反地主、反日」闘争へと動員したと記述している。そこには朝鮮開放のための闘いの文字はない。この時期、朝鮮独立や朝鮮革命を志す闘いを叫んだり、行動する状態になかったのである。しかし朝鮮共産党各派の争いは中共党内部に持ち込まれる傾向はあったことは事実である。

当時、中国官憲の取締りが厳しくなったが、朝鮮人は組織名称を純民族団体風に「朝鮮革命軍司令部」と改めることになった。しかし年が明けて1931年（昭6）、幹部たちは長春で日本警察によって逮捕された。これによって朝鮮革命司令部は壊滅した。そして吉林省では民族主義者や共産主義者狩りが厳しく行われた。しかし今の北朝鮮の公式伝記では、金日成は1930年

（昭5）に朝鮮革命軍の会議を開き、豆満江沿岸の抗日武装闘争の戦略基地を作るという課題を提起し、31年（昭6）、東満の明月溝で朝鮮共産党および共産青年幹部会議を開き、歴史的演説をしたと記載されている。何れが正しいのか全く不明確である。（金日成將軍革命活動史）

『満洲抗日戦争の始まり』 (18頁地図参照)

「満洲事変の勃発と中国共産党」

1931年(昭6)9月18日、日本軍は奉天(瀋陽)北方の「柳条湖」で鉄路を爆破して満洲事変を惹き起こし、15年間に亘る中国との戦争を開始した。柳条湖事件を口実に瀋陽を占領した関東軍は南満洲鉄道を北上し、翌日には長春(新京)を占領して21日には吉林に到着した。そして9月26日には我が意のままになる吉林長官公署を設立させ、南京政府(蒋介石政権)及び張学良政権(蒋隷下の満洲東北軍で奉天政府と称した)からの独立を宣言させた。

このような侵略に対する抵抗の主力となったのは、吉林省と黒龍江省に駐屯していた張学良の正規軍であり、次のような声明を出している。「日本軍は武力を用いて我が国の領土を侵略した。我々は必ず武力を用いて彼等を追い払わなければならない。守土抗戦、保国衛民は軍人の天職である。我々は中国民族に罵倒される漢奸(売国奴のこと)には決してならない。まして他人のなすがまま踏みにじられる亡国奴には決してならない」

1932年(昭7)1月31日、これらの反日軍はハルピンに集結して迫りくる日本軍に備え、集結した総兵力は約2万であった。しかし日本軍は強力に2月5日に四散した。東北軍は將軍だけでなく下級指揮官も立ち上がり、「延吉」の27旅677団第3營長「王徳林」も決起した。吉林が陥落すると、その東の敦化、延吉、琿春、汪清、和龍にも日本軍が入った。(18頁地図)【中国軍では「団」は聯隊、「營」は大隊、「連」は中隊、「排」は小隊である】

1932年(昭7)3月1日、長春(新京)で「満洲国」の建国が宣言されたあと、戦闘はますます激しくなった。その時の全満洲(東北)の抗日義勇軍の総兵力は40万を越えていた。しかし日本軍も増強され、義勇軍は追い詰められていた。黒龍江省内の有名な「馬占山」(後記)の部隊までもソ連領に脱出している。

「馬占山」という人物は、1903年(明治36)から反清国、反露国の軍事行動を展開した緑林(盗賊)の頭目で、日露戦争では日本軍に協力していた。「緑林」の由来は漢の王国・王鳳などが反乱し、湖北省の緑林山にこもって盗賊になったという「後漢書」の記事からである。満洲事変当時の日本人では、「馬占山」の名前を知らない者はいないほど有名な山賊集団であった。

セツシロ キムイルジョン カントウゲン チョウガクリョウ
拙書は表題の「金日成」が主題であり、満洲事変以来の関東軍の行動と、張学良が指揮する東
北軍の中国正規軍との戦闘経過は割愛し、金日成が所属した中国共産軍等の行動のみを記述する。
カツアイ
当時、満洲のみならず中国全土に横行跋扈（のさばること）していたのは、共産軍と「土匪」
ヒソク バソク ショウ グレンタイ パセン
「匪賊」「馬賊」等と称した「ならず者の愚連隊」であった。その大きいものが上記した「馬占
ザン グキョウ エイテン
山」の軍隊であった。その後の馬占山は日本軍と妥協して建国した満洲国軍政部総長に栄転し、
のち再び反満反日軍を組織したが敗れている。

中国本部（満洲等を除く漢民族の居住する中国大陆をいう）では「土匪」が各地で横行し、我々
ソウグウ ヤッカイ ドチャクミン リャクダツ ボウ
日本軍も限り無く遭遇した厄介な集団であった。この土匪は土着民が武装集団となって略奪・暴
コウ イナゴ ライショウ カイメツ
行する賊のことである。その発生の原因は種々あるが、蝗の大群などの来襲で農作物が壊滅状態
ク アバ
になると、自らが喰わねがために暴力団化し、特に鉄砲などを持っている連中が土匪となって暴
ヒソク
れ回ったようである。「匪賊」と呼ばれる集団も大体は同じようなものと思われるが、これは略
奪・暴行・強盗のみならず殺人までも行っていたようである。

ミン スイコデン ソウコウ シュリョウ ゴウケツ サントウショウ
明時代の長編小説である「水滸伝」に登場する「宋江」を首領とする豪傑たちが、山東省にあ
リョウザンバク ネジロ カンゲン テイコウ ホロ
る「梁山泊」を根城にして官軍に抵抗し、やがて滅びていく物語が思い出される。満洲は馬が発
グントウ バソク
達し匪賊が馬に乗るから、乗馬した群盗のことを「馬賊」と呼んでいた。以上述べた「匪賊」や
テキタイ
「土匪」、「馬賊」等は、日本軍や中国の正規軍に敵対する戦力はない。ただ農民等に対する略
奪・強盗集団に過ぎなかった。当時の共産軍も又、それに毛の生えたような程度のもので、日本
タチウチ
軍に正面から太刀打ちできないからゲリラ作戦をしたのであった。

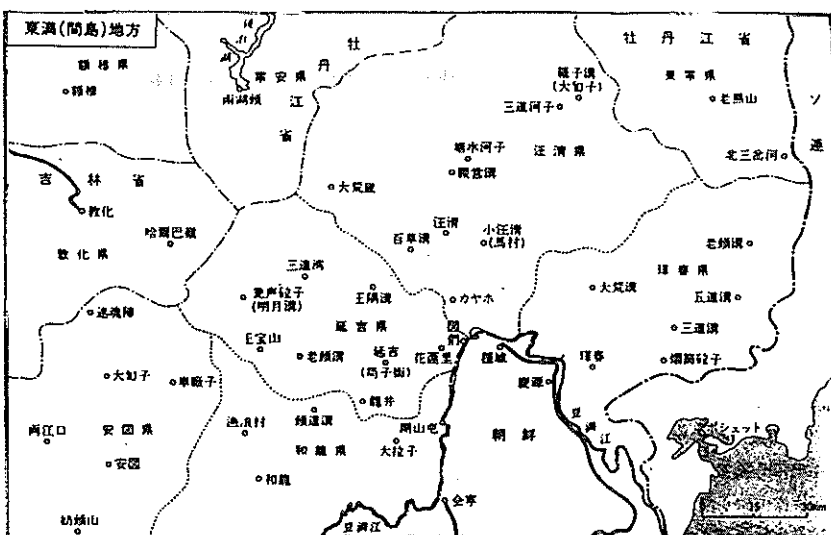
トウ マン ユウ グキ タイ 「東満の遊撃隊（ゲリラ）組織と金日成」

日本軍の進攻した最初の一年、救国軍を中心とする抵抗が行われていた時、共産主義者は全く
コンメイ グリラ
混迷していた。しかしその後、各地に遊撃隊が組織された。その指揮官は中国人で、兵員はほと
んど朝鮮人であった。そして路線的には左翼急進主義であったが、差し当たりは反日よりも反地
シコウ
主の志向が強かったようである。

カントウキョウヤク トウマン カントウ
1909年（明治42）の「間島協約」によって中国領と確定した東満の間島地方（次頁地図）
には、日本の植民地支配から逃れてきた朝鮮人の農民が多く移住し、日本の満洲進攻の前夜でも

(東満洲の間島地方の地図)

住民の圧倒的多数が朝鮮人で約80%を占めていた。間島は朝鮮民族運動の最大の拠点となり、朝鮮共産主義運動の拠点ともなっていた。全間島の党員数587人中、朝鮮人は576人を占め、数人



の中央から派遣した漢人の指導者が朝鮮人の党組織を指導するという構造であった。

『間島とは吉林省の東部(18頁地図参照)、豆満江北岸の地域で、李朝後期以降、多くの朝鮮人が国境を越えて定着した。現在の延吉朝鮮族自治州にあたり、中心都市は延吉である。歴史的に見れば昔の「高句麗」「渤海国」「高麗」(5~7頁参照)の国の一部で、騎馬民族の血統が混じっている関係からか、伝統的に北の民族は南の民族よりも強かったと私は感じている。現在も中国に脱出する北鮮の人は間島に縁故があると思われ、盛んに越境しているようだ』

東満特別委員会の宣言は、「中韓農民は連合して起ち、潜行戦(ゲリラ戦)を実行し、日本帝国主義を駆逐せよ」と呼びかけた。そして、この先では「日本帝国主義の走狗である韓国民族主義者」の打倒を掲げ、すべての地主の土地の没収とソビエト政府(会議・評議会の意)の建設をスローガンとしていた。

1931年(昭6)12月、明月溝(上記地図参照)で、東満各県党団積極分子会議が開かれた。この町は延吉から敦化に通じる街道の中間に位置し、住民は殆ど朝鮮人であった。ここに満洲に進攻開始とともに日本側は領事館警察の分署を設置した。他方、同地に駐屯する「徳林部隊」は、12月のはじめにやってきた満鉄測量隊を攻撃し、抗日拳兵の第一歩を踏み出した。北朝鮮では、この明月溝会議で金日柱が抗日武装闘争の戦略の方針を提案する演説をし、その演説がテ

も発表されたと言われているが、金日柱が参加したことは信じられないと言われている。

「^{キム イル ジュ}金日柱を^{キム イル ソン}金日成に改名した理由」

1931年（昭6）、朝鮮革命軍吉林省指導部に属する部隊にいた「金日柱」は、部隊が壊滅^{カイメツ}したため、母の住む「安図」^{アント}（前頁左下）に戻ってきた。1912年（大正1年）生まれの彼は、この年に19才になるのだが、ここで中国共産党に入党したのである。

満洲事変（1931、9、18）の開始とともに武装闘争を目指した彼は、そのために本名である「金日柱」^{カク}を隠し、東満の間島地方に伝わる伝説上の英雄の名前である「金日成」^{キムイルソン}を名乗ることになったと言われている。

私が初めて金日成の名前を知ったのは1938年（昭13）の暮れであった。北満の齊齊哈爾^{チチハル}（18頁地図の左上）に駐屯する札幌歩兵第25聯隊^{チュウトン レンタイ フニン}に赴任するため、北朝鮮の新義州から鴨緑江^{シンギシユウ オウリョク}にかかる鉄橋を通過し、対岸（現中国遼寧省）の町「安東」^{コウ リョウネイシツウ アントウ タントウ}（現丹東）で「金日成」の名前を初めて聞かされた。朝鮮半島の縦断鉄道は平穩に通過してきたが、一步満洲の地に入ると駅舎には満洲鉄道の従業員が武装して嚴重な警備体制を敷いていた。駅舎の周囲には深い遮断壕を掘り、^{ヘイオン}鉄条網^{テツジョウモウ}を張り巡らし、戦地に入ったことを肌で感じた。列車の窓には鎧戸の扉が設備され（日本内地も朝鮮半島も同様な設備がされていた）、夜間は車内の灯りが外に漏れないように扉を下ろさなければならなかった。

各列車には警備の兵隊が乗車していた。この辺一帯の山岳地帯は屢々ゲリラが出没してくるから、兵隊が列車に警乗するのだと言う。そしてゲリラの隊長の名前が「金日成」だと聞かされた。

私は1940年（昭15）から北支那（現中国）戦線に出征して約3年間従軍し戦火を交えたが、ゲリラ戦などは「兵隊ごっこ」のようなもので、金日成のことはすっかり忘れていた。戦後になって満洲を3回訪れた際、間島地区に少年農業開拓団員として入植していた人達から、現在の北朝鮮の金日成主席は偽物だと聞かされ、まさか本当だろうかと思ったことがある。

間島地方のの伝説上の英雄「金日成」の名を借りて、匪族か馬賊の頭目（よからぬ集團の長、親分）が、知らぬ間に一国の頂点に立つ指導者になったことに吃驚したのであった。

今回、古代の朝鮮半島の歴史を学習し、「金日成王朝」の成立を調査していくうちに、四人の金日成の存在を知り、愕然としながら改名の理由を知ったのであった。

「金日成と抗日第一路軍」

中国共産党の指示のもとに満洲各地に遊撃隊が誕生した。当時の中国共産軍の中央は蒋介石に
オ チュウセイ タイキヤク トドロ チンウン
追われて長征という退却中であつたが、戦後、名声を轟かせた「陳雲」が満洲に派遣されていた。

満洲の抗日軍は「中・韓・蒙・満の被圧迫民族の統一戦線」を結成し、満洲北部が第3路軍、
中部が第2路軍、東南部が第1路軍の指揮系列に編成された。金日成は第1路軍に属し、日本の
タツガエ カントウカンジン カカ
偽満洲国統治を覆し、間島韓人民族自治区を建設しようと言うスローガンを掲げていた。

戦闘の細部は省略するが、「抗日第1路軍略史」を金日成が書いたというのは、その時期に、
第1路軍系の上官たちが戦死したり投降したり、逮捕されていなかったから金日成が書いたのだ
ある。この「略史」は、文章力、内容ともに、かなり「質」が低く、この「略史」を訳した中国
人は「かなりひどい文章で、意味が通じないところが多い。誰が書いたのか」と絶句したと言う。

内容は明らかに朝鮮開放の思想が濃厚で、その視点の論説が多い。朝鮮民族が多住している東
満地域が活動地域であり、隊内に朝鮮人が多いという条件もあったからであろうが、金日成自身
の朝鮮志向は強かった。それは、あくまで、中国共産党の方針の許す範囲内であつて、決してそ
れは飛躍した発想ではない。金日成の「略史」が中国共産党指導下の闘争をあくまでも正当化し
たものであり、自分を神格化する野心のない時期に書いたもので、内容は信頼できるだろう。し
かし北朝鮮現代史では、第1路軍の組織は金日成の指導と組織力により成立したと書いてい

この時期の「略史」で理解に苦しむ記述がある。「我が軍は満洲の広い地域で活動を展開した
ばかりでなく、朝鮮内に深く進攻して大都市を攻撃し、朝鮮国内を沸き立たせた」と書いている。

この時期に金日成の所属した部隊のみならず、他の抗日部隊で朝鮮に進攻し大都市を攻撃した
事実はない。「朝鮮全史」にもその記事が見当たらないことを見ると、何か金日成の魂胆がある
ようにも考えられる。なお、共産主義者以外の武装勢力の朝鮮内の活動も報告されていない。

金日成の所属した部隊は、1936年（昭11）に抗日第1路軍第2軍に改編され、その指揮
下に3個の「師」があり、金日成は6師の師長に任命された。そして第1路軍の最後の編成で1
938年（昭13）、3個の「方面軍」に改編され、金日成は第2方面軍の指揮を取るようにな
る。第2方面軍の総人員を「略史」は約300人と書いており、「白髮三千丈」式の名称である。

「朝鮮人民革命軍の名称の謎」

現在の北朝鮮では金日成によって「朝鮮人民革命軍」が創設されたと説明されている。その創設の時点は1934年（昭9）とされているが、これは無理な主張である。そこで「朝鮮人民革命軍」ということが、北朝鮮で問題にされてきた経過を整理してみたい。1946年（昭21）8月刊行の「われらの太陽」に収録された最初の金日成略歴では、金日成は36年（昭11）より「抗日第1路軍」に勤めていたことは事実である。同じ本に収められている「金日成將軍遊撃戦史」は、金日成からの聞き取りに基づいたものとされているが、そこでは、32年（昭7）に「中韓反日遊撃隊—東満人民反日遊撃隊」となり、「わが遊撃隊の戦力は日増しに高まり、34年（昭9）には「人民革命軍」として、師団の戦力は一層大きくなった」と書かれていた。誇大妄想的な表現ばかりが印象的である。

これは1947年（昭22）11月刊行の彼の著書「金日成凱旋記」に抄録された。この本が48年（昭23）3月再版されると、1932年（昭7）に「人民遊撃隊—後の朝鮮人民解放軍が組織され」、「1934年（昭9）には軍力は一層大きくなった。そしてもっと大きな戦闘を一つした」と書き換えられた。そして再版の解説では、抗日路軍というものは「朝鮮人民革命軍」であると加えられているが、この名称は採用されておらない。1948年（昭23）2月、朝鮮人民軍の創建式で総司令官「崔庸健」は、金日成をはじめ「偉大な、われらの首領」と呼んだが、人民軍隊は「金日成將軍が親しく領導してこられた輝かしい人民遊撃隊の伝統を継承し」と述べたに過ぎず、「朝鮮人民革命軍」の名称は成立していなかったのである。

1948年（昭23）3月には、北朝鮮の党中央はソ連派がにぎり、今度は「金日成將軍パルチザン部隊」という表現が一般化した。「パルチザン」とはロシア語で、戦時に武装した一般人民によって組織された非正規の戦闘集団（遊撃隊）のことである。その過程で「朝鮮人民革命軍」という言葉が歴史雑誌の中で使われていったようである。

実際は、東北（満洲のこと）で活躍していた東北人民革命軍を抗日連軍に改編する際に、中国人と朝鮮人の部隊を分離し、朝鮮人の部隊を「朝鮮独立革命軍」または「朝鮮人民革命軍」とする提案があったが、中国人と朝鮮人とが対立するのを恐れて、どちらの名称も見送られている。

ザイ マン カン ジン ソ コク コウ フク カイ
「在満韓人祖国光復会」

朝鮮へ進出するために長白山地区遊撃拠点を建設することに決定すると、36年(昭11)6
月に、「在満韓人祖国光復会」の宣言が出され、十大綱領が発表された。それによると当面は直
接、朝鮮で戦うことなく、満洲の日本軍をまず駆逐して、東北地方(満洲)で中・朝両民族の
開放を保護する政府を樹立し、東北で朝鮮民族の自治を実現しようということであった。それは
どこまでも中国革命を遂行する上で、朝鮮の開放を戦う必要があるということであって、朝鮮開
放、朝鮮革命は第一目標ではないのである。これがコミンテルンの一国一党主義である。

宣言には「韓国民族が自己の独立開放の為に強盗たる日本の奴等と神聖なる闘争を敢行するも
のに非ずして何ぞや!。これは韓国民族が豊富なる独立思想と闘争精神に基づき、未来の光復事
業が必ず勝利に帰すべきことを如実に証明している」と述べている。

この「在満韓人祖国光復会」であるが、「朝鮮全史」を始め、北朝鮮で刊行されている歴史書
では、総べて「祖国光復会」と記し、金日成をその会長であったとしている。これは嘘である。
日本の官憲資料を始め殆どの資料は、「韓人祖国光復会」あるいは「在満韓人祖国光復会」とさ
れている。戦後、北朝鮮でも58年(昭33)に刊行された「朝鮮民族開放闘争史」では祖国光
復会としているが、「在満韓人祖国光復会」が正式な名称である。。

さらに、この会の宣言の発起人は、呉成崙、嚴洙明、李相俊の三名で、不思議なことに金日成
は発起人に入っていない。そして北朝鮮側から発表されたものには、この三名は消されている。
そしてまた、呉成崙は「アリランの歌」の主人公の張志楽の友人・呉成聲の別名であり、軍内で
は金日成より上席で東満で活躍していた人物である。

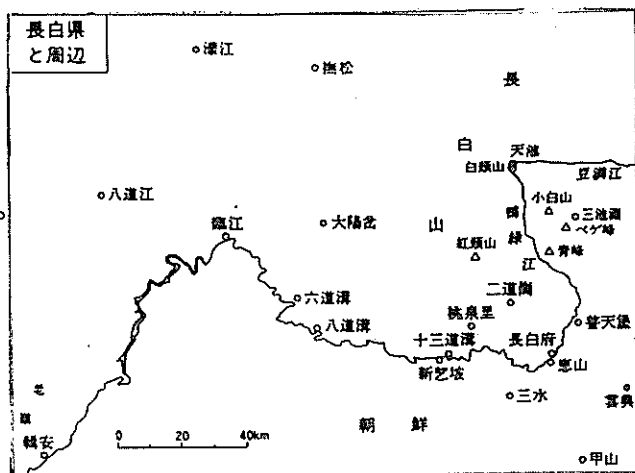
「朝鮮全史」に見られる北朝鮮現代史の記述のように、在満韓人祖国光復会が金日成一人の構
想と組織力によって結成され、活動を展開するに至ったという程、事は単純ではなく、コミンテ
ルン、中共中央、満洲省委員会、在満朝鮮人共産主義者がさまざまな形態で関与し、そして成立
していったものである。但しこの会が成立後、金日成が活動したことは明らかである。

独立の回復という意味の「光復」という言葉は、中国・孫文等の「辛亥革命」にいたる過程で、
浙江省で1904年に作った反清革命結社の「光復会」が始まりである。(反満洲族革命)

「普天堡襲撃事件」 (下図参照)

反日民族統一戦線は、第1路軍の第2師、4師、6師が共同して朝鮮独立のための闘争を実行する作戦を立案した。この三ヶ師の師長の中で朝鮮人は金日成だけで、彼が主導権を取って朝鮮国内の襲撃目標に選んだのが普天堡であった。(師は名ばかりで兵員は2百〜3百人の雑軍)

普天堡は鴨緑江に面した小さい町で、日本人26戸、50名。朝鮮人280戸1323名。中国人2戸、10名が居住し駐在所に5人の警官がいる村落である。20里ほど離れて1万3千人の恵山鎮があり、鴨緑江をはさんで対岸の満洲には長白県の中心都市で人口1万の長白府があるが、余り重要な地点ではない。



1937年(昭1.2)6月4日午前0時、金日成は第6師隊員90名を率いて筏で鴨緑江を渡り、密林の中に潜んでいた。先ず10時に電話線を切断し、機関銃2挺を駐在所を襲撃した。5人の警官(内2名は朝鮮人)は皆逃げて身を隠したから、駐在所の兵器庫から軽機関銃1挺、小銃6挺、拳銃2挺、弾薬数百発を奪った。同時に郵便局に放火し小学校も延焼した。第6師長の金日成は村民に挨拶をして対岸に引き上げた。以上が彼等が報告した戦闘の経過である。

金日成の戦闘記では「普天堡侵攻作戦の大勝利」と題し、一見すると日本軍基地を攻撃したように見せ掛けていた。満洲には当時、日本軍の最精鋭部隊・関東軍数十万が駐屯し、装備は劣等で未熟な遊撃隊に奇襲されるようなことはなく、攻撃目標は小さい駐在所であったのである。

この朝鮮国内での戦いが朝鮮国内のマスコミに大きく報道され、朝鮮開放の闘士としての金日成の名がクローズアップされるようになり、その後の金日成の大きな政治的遺産となったと、彼らの報道は針小棒大に書いた。しかし実際の「朝鮮日報」や「東亜日報」は小さな事件の扱いであり、「東北人民革命軍・金日成の一隊」とか「金日成一派共匪」と書いていた。私等のような戦闘体験者から見れば幼稚な戦で、初歩のゲリラ戦に過ぎないと言わなければならない。

「関係者の逮捕と組織の壊滅」

フテンボ 官憲側は必死の捜査を進めた。しばらく成果がなかったが、9月から10月にかけて、再び「恵山」部落（前頁参照）に潜入した3名が逮捕されると関係者が割り出され、警官が朝鮮側から越境して長白県内で8名を逮捕した。以後逮捕は広がり、朝鮮内で162名、満洲長白県で59名が検挙された。長白県の祖国光復会組織はほぼ潰滅したと言ってよい。この事件の取り調べと裁判の過程で、金日成の身元も明かとなった。「思想彙報（報告の意）」に載った恵山事件の報告の中に、次のような記述がなされている。

『金日成の身許については種々の説があるが、本名は「金日柱」、当年29才、平安南道大同郡古坪面南里の出身で、幼児に実父母に伴われ間島方面に移住し、同地方において成人し匪団に投じた朝鮮人であるというのが確実で、現にその実母は生存している由である』。

実母の生存というところが違うだけで、金日成の経歴はほぼ完全に掌握された。普天堡事件の金日成は死亡したのであり、現在の金日成とは違うという主張が現在までいろいろと言われているが、この官憲報告の記述は、そのような主張に対する明確な反論となっている。

この報告の中で、日本官憲は咸鏡南道の国境地域の浄化工作の成果を誇っている。事件後、警官の増員を行うとともに、各里ごとに18才以上31才以下の青年の全員を団員とする、国境地方防共団を組織した。団の活動は修養と営農を結びつけたものであった。この活動によって匪民分離工作に非常な成功を収めたと報告し、特に逮捕に住民の協力があつたことを喜んでいる。

従来ならば当然、部落民が彼ら匪賊集団を庇護し、到底逮捕することは出来なかったと想像される。今までは男子が生まれると、両親は「金日成のような偉人になれ」と祈ったという、この地方の人心を短期間にそこまで指導できたことは、非常な成功と言わなければならない。

しかしこの事件の逮捕者の一人は、第6師長の金日成はモスクワの共産大学を出た36才の人だと証言し、他の一人は、ソ連に逃れて赤軍士官学校を出た人物だと語っていたと言う。権威を高めるために年齢を高くし、自分はソ連留学から帰ってきたと噂を流し、神秘化を狙っていた結果であろう。そもそも金日成という変名自体が一種の伝説的な名前である（24頁）。むしろ金日成がゲリラの指導者として能力があつたのかも知れない。

「蘆溝橋事件の発生」 (日中戦争)

1937年7月日、蘆溝橋事件の発生、そして日中戦争の勃発と新事態に直面した時、抗日連合軍の幹部たちは、誰もが「戦線の拡大によって満洲に於ける日本軍の兵力は減少し、討伐隊に投入できる兵力が少なくなるため、事態は抗日連合軍に有利に展開していく」という予想をし、抗日勢力全体を奮起させていた。そして直ちに「中日戦争にさいして東北同胞に告げる書」を発表したのであった。

「東北抗日連合軍第1路軍総司令部の布告」は「全国総動員のもと、すべての中国人が旧怨を放棄し、親密に連合して中日戦争に応え、暴動を決起し、日本帝国主義を打倒し、傀儡政府である「満洲国」を転覆し、独立・自由・幸福の中国のために奮闘せよ」という内容であった。

しかし、現実では抗日連合軍幹部たちの思惑を越えて、討伐戦は強化され、抗日連合軍への圧力は強まっていった。日本軍の作戦は、まず、第1路軍系の活動地域である東満地区を討伐の重点地域として、そこに日、満の軍・警の大兵力を投入し、金日成部隊を目標に討伐と帰順工作の二本立てで攻撃した。そのため、第1路軍系の抗日部隊の崩壊は急テンポに進展した。その時、第1軍第1師の師長・程斌は遼寧省の本溪(町名)で部隊を率いて日本軍に投降、帰順した。第1路軍は、事態の打開のため部隊を西に送り、関内(万里の長城の内側)の八路軍と連絡をとり、戦線を強化しようとしたが、圧倒的な日本軍の兵力の前に計画は進展せず、各部隊に犠牲者が続出して、闘争は苦難な時期を迎えていった。

遊撃戦(ゲリラ)も困難になり、犠牲者が増大するにすぎない、抗日軍の兵士たちの投降者が増大した。日・満の両軍・警は投降者を処刑せず、帰順者として扱い、彼らに賞金や戦場を保障する作戦を採用したため、投降者の増大に拍車をかけた。

金日成の第6師は第2方面軍に編成かえになり、金日成が第2方面軍の指揮をとった。直ぐ部隊は長白県に向かって雪中行軍を開始し、日本軍に追われながら百余日にわたる苦難の行軍が始まった。部隊内の一女性兵士は、農民と切り離されて食糧の調達が至難で、地下足袋の不足とが最も困窮したと述べている。(当時の方面軍司令官は殆ど26~28才の青年である。零下40度の満洲を越冬するには若い体力が必要で、白馬にまたがる老将軍の出る世界ではなかった)

「金日成と前田警察隊の全滅」 (23頁地図参照)

追跡^{ツイセキ}されていた金日成^{ケンノウ センカ}の部隊が、健闘して戦果をあげた例を取り上げてみる。もとより金日成^{ケンノウ}の部隊では帰順者が多く出ており、参謀長まで部下十余名と軽機関銃二挺をもって日本軍に投降^{トウコウ}している。この投降者は延吉^{エンキチ}、汪清^{オウセイ}一帯 (23頁地図参照) で、日本軍の金日成討伐隊に参加していたから、第2方面軍にとっては恐ろしい事態であった。1940年 (昭15) 3月25日、安図県^{アント} (23頁地図左下) 大馬溝西方の高地で、追跡してきた和龍県警防大隊前田中隊を攻撃し、事実上これを全滅させるという戦果をあげた。前田中隊の指揮官「前田武市」警正は、朝鮮の警察から指揮官として満洲に来て、はじめ汪清県にいたが後に和龍県南坪警察署長、三道溝署長をつとめた。1939年 (昭14) 4月に編成された金日成匪討伐隊に参加、同年10月より宇波^{ウハ}警防大隊が組織されるや、その中隊長となった。常々「金日成の首級は俺が挙げる」と白頭山の密林に分け入っていた人物である。1940年 (昭15) 3月11日、金日成部隊は和龍県紅旗^{コウキ}河の日本人木材所を襲撃した。ここには森林警察隊が守っていたが、このとき寝込みを襲って、大量の銃弾と米を奪うことに成功した。そして直ちに引き上げ、一昼夜のうちに80里以上進んで、はじめて休息したと言っている。これは神業でなければ出来ないことで金日成の大法螺だ。

一方、この知らせを受けた前田中隊 (隊長以下145名) は直ちに出勤し追跡を開始した。当時は山野は雪に覆われて足跡を辿って追跡することができた。金日成は当然、足跡を別の方向につけて、追跡を断つことを試みている。しかし、前田中隊の二人の偵察員を捕まえて尋問すると、本隊が近くまで来ており、足跡は発見された事がわかった。そこで急いで逃げたが、結局追いつかれたため待ち伏せて攻撃し、前田中隊をひるませた。そのすきに金日成部隊は前進した。

前田中隊の「戦闘詳報」には次のように書かれている。『突如北方高地に潜伏していた匪団から一斉に軽機関銃の猛射を受けると同時に、南方の雑木林に散開していた匪団主力より全面に亘り側射を浴びせられ、中隊長は遂に最後の突撃を決意した。死闘一時間、匪団に大損害を与えたが、我が方も遂に弾丸尽き、中隊長以下〇〇〇名は壮烈な戦死を遂げ・・・』。嗚呼、悲しい哉。

関係者の言によると、生き残った者は20数名だと言う。警察隊145名のうち日系は9人、一部に満系も居たが、残りは殆ど朝鮮系であった。

「金日成の闘争方針の変更」

前田中隊の戦闘は痛ましい結果となったが、警察隊は軍隊と異なり戦闘部隊ではない。そのため^{ソウビ}に^{イチジル}は^{レッセイ}著しく^{ミジュク}劣勢で^{シンツ}訓練も^{ウンディ}また未熟で、指揮官の資質には雲泥の差があったと思われる。

1941年（昭16）ごろになると、抗日武装闘争は最も困難な時期を迎えてきた。そこで金日成は「朝鮮民族解放闘争史」の中で、第2方面軍の闘争方針の変更を次のように述べている。

『我々が敵に引き続き打撃を与えようとすれば、数多くの同志の犠牲を伴わざるをえない。だが、敵との戦いで、いまだ我々は最後の決戦に到達したのではない。・・・いまだ最後の決戦の時期でない以上、我々が過去10年間の実地戦闘を通じて、・・・育成された堅実な幹部たちを、現情勢で敵と我との間の力量を考へることもなく性急病にかかり、革命の全体利益とは何等の関連がない、激烈な大規模戦闘になるがために実行して無謀な犠牲を出すという、冒険盲動主義は厳しく排撃しなければならない』。

このような考えから、「貴重な革命力量を引きつづき保存育成しつつ、大部隊活動としてではなく、小部隊遊撃活動を敏活に展開し、いたるところで敵に引きつづき打撃を与えること」が主張されたと言うのである。これは要するに、日本の敗北の時が何時か来るのだから、ここで玉砕することを避け、これまでの遊撃戦を中止し、小部隊での活動に変えようと言うことである。ところが、ここではソ連内での幹部養成、ソ連領内への撤退という話は出てこない。

さらに、次のようにも書かれている。「大部隊活動から小部隊活動に移行するのは、朝鮮の反日民族解放闘争の要請であるばかりでなく、コミンテルンの勧告でもある。ソ連は今日、東西両方から二つのファシスト国家から挟撃を受ける危険にさらされている。ソ連は・・・国防力を強化するため東方では緩和の政策を採り、ソ満国境一帯で大作戦は当分中止すると勧告した。

金日成の方針転換はコミンテルンと直接的に結びつきである事が強調され、勢力の温存と入ソという我が考えを説明したのではないだろうか。当時の第2方面軍（金日成）の状況は、関東軍憲兵隊では、6月200人、7月200人、8月160人、9月120人と見ている。8月には「数隊に分かれた」、9月には「数団に分散して潜伏した」と観察している。8月を転機として変化が起ったことが、ここに反映しているのかも知れない。

『金日成部隊の入ソ』

関東軍の40年(昭15)の資料には、40年10月に金日成・第2方面軍の「一部分の匪徒は入ソした」としている。さらに41年(昭16)の資料には、40年11月以降に金日成匪約30が入ソしたとし、「入ソ匪は国境でソ連軍に武装解除され護送」とある。42年(昭17)の資料になると、40年(昭15)8月、金日成は部下18名を引き連れ、安図県を出発して、入ソしたとの供述が記録されている。一方、69年(昭44)延吉で死んだ元第2方面軍の排長(小隊長)金明柱は、40年8月の雨の日、金日成とともに入ソしたと述べたと言う。ソ連側は金日成を知らず、入ソするなど言い石灰の洞窟に閉じ込めたという。「延吉党史事件と人物」では、金明柱の入ソ時期は40年9月とされている。〔第3方面軍でも同年10月に一部が入ソ〕

明らかに金日成の部隊は他に先駆けて入ソしたようだ。金日成は部下の第1中隊とともに入ソしたのである。重要なことは最初は警戒され、監禁という不当な取扱いを受けたことである。

満洲国警察特高科の「特務彙報」康德10年(1944)第4号の記事には、次のように記されている。金日成は40年(昭15)末に入ソしたが、ソ連側との連絡がないまま入ソしたため、ソ連側に抑留されて一時は監獄に入れられた。中国共産党本部より派遣されていた「周保中」が介入し、金日成は釈放されてハバロフスクへ行き、部隊員は野営学校に行つたと書かれている。

周保中の日記には、40年(昭15)12月11日頃に、「金日成は部下16人を連れて琿春(18・23頁地図参照)より入ソ」とあるのは、噂を聞いたということだろう。

又、関東軍の野副少将の指揮する討伐隊が、金日成部隊の捕捉殲滅を目標の一つにして秋季作戦を開始したのが、9月のことであった。しかし討伐隊は一度も金日成部隊と遭遇しなかった。これは討伐作戦開始以前か、開始直後に、つまり40年8～10月に金日成は満洲を遊んでいることを物語っている。

第1路軍の潰滅の悲劇の中で、金日成部隊は指揮官の早期の決断で多くの戦士を温存できた。これは言うまでもなく、適時に退却するということは、遊撃隊指揮官の重要な能力である。しかし「朝鮮全史」を始め「北朝鮮現代史」は、金日成の入ソに関しては何も言及していない。

『行き場がなくなってソ連領に入った』というのが、全ての入ソ者の言である。

「入ソ中の金日成の行動」

金日成の部隊をあげての入ソはソ連側の嫌疑を受け、取り調べを受けていたその時、ソ連極東軍内部では満洲の遊撃戦に対する新しい働きかけが始まっていた。そこで金日成はハバロフスクへ呼び出された。その目的は、中国東北部の遊撃隊をソ連軍の指揮下に入れるためであった。満洲での遊撃戦を終結させ、金日成部隊をソ連軍の偵察と諜報活動に利用しようという考えであった。しかしソ連の提案には全員が反対し、東北抗日連合軍の旗は揚げ続けることになった。

金日成等が入ソした時、満洲の状況はどうなっていたのだろうか。日本軍の討伐は猛烈に進められていた。日本軍の隠語によると、目標は「トラの金日成」、「クマの陳翰革」、「シシの崔賢」、「ウマの安吉」らで、懸賞金は金日成と崔賢が一万元、他は三千元でだったという。そして日本軍の討伐隊は早くから崔賢と安吉は脱出したと見ていたが、金日成は潜伏中とみて最後まで追及を行っていた。しかし41年（昭16）、金日成らも逃亡したと判断して部隊は解散した。

『日ソ中立条約成立の影響』

1941年（昭16）4月13日、日ソ中立条約が締結された。ソ連は日独からの挟撃を免れようとして必死だった。この条約による影響はないと断言していたソ連側は、後には公然と抗日連合軍をハバロフスクから満洲に返すことに反対した。それは日本を挑発する憂いがあるからだった。

ソ連極東軍と抗日連合軍の目下の関係は不正常であった。満洲の遊撃活動は中国革命の一部で、日本軍を満洲から追い出すことを使命としていた。若し抗日連合軍がソ連領に長期に留まると、大衆工作上、多くの不都合が発生し、抗日軍は自滅するかも知れない。路線を変更するのは中共中央の指示がある時だけで、ソ連軍には抗日連合軍の行動を変更する権限はない。しかし結局は抗日連合軍の主力はしばらく満洲に留まることに同意した。

「ヒットラーのドイツ軍は電撃的にソ連領に侵攻した」

6月22日のこのニュースは、野営地に配属されていたソ連軍将校から説明された。日ソ軍はこの好機にソ連を攻撃するするのだろうか、緊張が野営地全般に広がった。

「12月8日、日本は米英に宣戦を布告し、太平洋戦争が開始」

そこに上記の大ニュースが飛び込んできた。これで日ソ戦争は遠のいた。全ての形勢は自分等

マスマス
にとって益々有利に展開すると考えた。日本と米英の戦争は、自分たちの抗日戦争の最終の勝利
コウテイ ソクシン
を肯定し、促進させる作用を持つと人々は考えたのであった。

ソゲキリョダ
「第88特別狙撃旅団」

ソ連の「ハバロフスク」から約40キロ離れた村落「ビヤツク」が、金日成の亡命先であった。
マルタゴヤ サンザイ イ ノコ
森に囲まれた20戸ほどの丸太小屋が散在しており、朝鮮人と中国人の遊撃隊の生き残り組が生
チョウバオチュン キョウドウリョダ ヘンセイ
活していた。そこに中共本部から派遣されていた周保中は東北抗日教導旅団の編成を考えていた。

ソ連はドイツとの戦争で最も苦しい最初の冬を乗り切り、42年（昭和17）6月には、日本の
シュドウケン ソウシツ テンキ
海軍はミッドウェイ海戦で敗退し、戦局の主導権を喪失する転機となった。そこでソ連の指導部
カッパツカ
と抗日連合軍幹部は、将来の決戦に備えるため、準備を活発化させる条件が生まれたと判断した。

ソ連軍は入ソした彼等を、将来の対日戦争に備えて教育訓練することにして「第88特別狙撃
リョダ ソウセツ
旅団」を創設した。総人員は200余人（うち朝鮮人隊員は約60人）、旅団長は満洲抗日連合
チョウバオチュン ショウワ
軍の指導者の中共本部派遣の「周保中」で、少佐の階級を与えられた。旅団は4個大隊編成で、
エイチュウ テイイ レン
金日成は第1営長（大隊長）に任命されてソ連軍大尉を与えられた。各営は2個連（中隊）から
レン
なり、第1連は中国人系（含む朝鮮人）で抗日連合軍からなっており、第2連はソ連人系で少数
コウセイ セイキダ
民族で構成されていた。そして正規軍ではないから、周保中や金日成は臨時の将校と言うべきで、
カンシ フクチュウ ツ ヘンセイ
監視のためにソ連軍人の副長が必ず付けられていた。即ち編成はソ連軍式で指揮権はソ連側にあ
り、隊員の身分もソ連軍将兵であった。

エイ
営（大隊）の人員は約150名で、金日成の第一大隊の大半は朝鮮人であった。そして隊員は
キムジョンスク
原則として結婚は許可されない。金日成が「金正淑」と結婚したのは入ソする少し前であった。

チョウハクケン
（彼女が金日成の部隊に入隊したのは1936年（昭和11）の春で、長白県である）

ソゲキリョダ コウカ
特殊部隊の第88狙撃旅団の目的は、日本軍の後方に降下してパルチザン活動を展開し、補給
バクハ トウテキ
路の破壊、輸送隊の爆破などの特殊な任務が予想され、射撃、投擲、銃剣術、爆破、スキー、落
ロオ キビ
下傘降下など、目白押しの訓練は厳しかった。

ソウセツ スイコウ
但し、第88特別狙撃旅団は創設以来、遊撃戦の任務を遂行するために、満洲に出撃したこと
ナカマ ヨ
は全くなかった。（仲間の呼び名は中国語で、金日成は「チン・ツ・チョン」であった）

『ソ連の対日宣戦布告』

《1942年(昭17)2月16日、^{キムイルジョン キムジョンスタ}金日成と金正淑との間に、男子が生まれた。それが後年の「^{キムジョンイル}金正日」である。44年に次男がうまれたが、のち死亡した。》

ソ連が米英など連合軍側に対日参戦を正式に約束したのは、1945年(昭20)2月のヤルタ会談(黒海のクリミア半島)の時である。その密約では「ドイツが降伏、かつヨーロッパの戦争が終結して2〜3ヶ月後、ソ連は次の条件に従い、連合軍とともに日本に対する戦争に参加することに合意した」とあり、ソ連の^{チシマ}千島、^{カラフト}樺太などの帰属を条件に対日参戦を約束している。

第88狙撃特別旅団の将兵が日ソ開戦が近いと感じたのは、45年4月5日、ソ連外相モロトフが、日ソ中立条約の延長はないと日本側に宣告したというニュースを聞いた時であった。しかし旅団は創設以来、満洲に出撃した隊員は全くいないことは前記した通りである。

それが「^{ゲンダイン}北朝鮮現代史」になると、この時期、金日成は小部隊を満洲や朝鮮国内に送り出し、朝鮮開放のために戦ったと記している。指揮権はソ連にあり、金日成の権限外で「嘘」である。

8月8日未明、日本軍に対しソ連軍の攻撃が開始された。この時、第88旅団の隊員は誰一人としてこのニュースを知らなかった。8月9日早朝、ラジオ放送はソ連の対日宣戦布告と戦況ニュースを伝えた。ソ連軍の東北進攻が大々的に報道されるにつれ、兵営は一斉に大喚声が上がった。

^{チュウパオチュン}周保中旅団長は次のように述べた。ソ連赤軍の奮闘により、日本ファシストの最終的崩壊は加速された。中国人民の最終的勝利は正に到来しようとしている。長期間に亘り、我々は党中央と^{カクダン}隔断された状態にあったから結束しなければならない。我々は東北(満洲)で^{ケツソク}八路軍と会師する。国民党(蒋介石軍)が東北を占領するなら、抗日連合軍は農村に入り、大衆を動員し、遊撃戦を展開する。そして八路軍、新四軍(両軍とも中国共産軍)と合同して、国民党の進攻を粉碎して東北を開放し、全中国を開放するのだ、と。

ソ連は対日宣戦布告すると、9日未明より赤軍は戦闘を開始し、赤軍は牡丹江の郊外に落下傘^{セントウ}降下した。又、一方では海空より朝鮮の雄基港方面を攻撃し、8月11日になって海軍陸戦隊が^{ユウキ}上陸して同地を占領した。中国側で発表されている、いくつかの文献を読んでも、なぜ第88特別旅団は出動しなかったのか、ソ連はなぜ、出動させなかったのか その理由は判然としない。

「第 8 狙撃特別旅団の朝鮮人たち」

(以降 88 旅団と略す)

チュウバオチュン

周保中日記には 1944 年 9 月 8 日現在の 88 旅団の総員は 1007 人で、中国人は 376 人、

北方系は 356 人、朝鮮人は 100 人と記録されているが、朝鮮人が特別な教育を受けいていた

形跡もない。しかし朝鮮人は日本が敗北した時、祖国朝鮮の革命をどう進めるかは考えていた筈

だ。恐らく自分たち満洲で苦勞してきた仲間が主導権を握るべきだと思っていただろう。

88 旅団の幹部の中では、佳石泉副参謀長と佳庸健が 1900 生まれで、年齢、経歴、現職、
周保中との関係からも断然トップの実力者であった。次いで元北満省委書記の金策である。金日

成は 1912 年生まれで、上記の者に比べ年齢は 10 歳も若い。党歴も浅く、もっぱら軍事面で

能力を発揮してきた。しかし 88 旅団では營長であり、現在の地位からすれば第 2 位であった。
金日成は他の者にはない決定的な資産があった。彼は東満で活躍し、北朝鮮内に攻め込んで金
日成の名前は広く知られている。知名度では筆頭であった。さらに金日成はソ連との関係も悪く

なく、積極性や部下の掌握度も能力も高く評価されていたようだ。

以上のような金日成の資質を考えると、年長者たちは、金日成を前に立てることによって、満
洲の遊撃隊が、開放後の朝鮮革命の主導権を取ることを目指したのではないかと推測できる。と
言うのは、この人たちこそ、開放後の金日成を陰に陽に補佐し、唯一の「首領」に押し出していっ

た人物だからである。それらは自らの主体的選択なくして、出来るはずはない。
比喩的に言えば、この三人の関係は、長男と次男は条件のよい末弟に家督を継がせることを決
断し、末弟の賢明さをたたえ、自らもへりくだって、弟に仕えようとするのである。

一方、ソ連との関係を見てみよう。88 旅団にはソ連籍朝鮮人将校も 12 名も加わっていた。
ソ連側は金日成を将来の北朝鮮の指導者として押し出すというような考えを、持っていたとは考
えられない。1944 年 2 月 15 日、ソ連極東軍の將軍と政治部宣伝部長メクレルが 88 旅団の
査察に来た。旅団長の周保中は「軍官教育をよく行っている者」として金日成を第 2 營長ととも
に挙げて報告した。メクレルは北朝鮮を占領するソ連軍の政治部の課長として、開放後の政治に
一定の役割を演じた人物だ。金日成については特別な指名は受けていないが、上部からパルチザ
ンのグループを見て、その中から指導者を選べと指示を受けてたのが全てだと、回顧している。

「第 8 8 旅団の朝鮮へ出発」

旅団は対日戦争に加わることはできなかった。日本政府は8月14日に降伏し、その後も戦闘は続けられたが、満洲での戦闘は8月20日には完全に終わった。8月17日、旅団を57個に分け、朝鮮を含むソ連軍が占領した57の地点に赴き、警備の任務を遂行することに決定した。

9月2日、東京湾の米艦ミズーリ号上で日本代表は降伏文書に調印した。ソ連側からの指令はこの後に出た。旅団長の周保中の日記によれば、本部の動き出したのは9月5日のことであった。

金日成は9月5日、第一陣で出発した。金日成に同行した俞成哲によれば、一行は60余名で子供連れの女子隊員はあとに残ったのである。当初、満洲に入り、牡丹江をへて新義州に至り、そこから鴨緑江を渡って平壤に入ろうとしたとのことである。満洲抗日軍の戦士としては自然な志向で、満洲の戦場から凱旋することこそ、政治的権威づけにも望ましいことであった。

金日成らの隊はハバロフスクを汽車で出発し、南下して中東鉄道に乗り換えて牡丹江に着いたと考えられる。その日付ははっきりしない。牡丹江駅に着くと、駅前広場で歓迎集会が行われた。市内五万の朝鮮人を代表する委員長が歓迎の辞を述べたのに応えて、戦士を代表して挨拶したのは金策と王効明であった。代表は日本帝国主義からの開放の喜びを述べた。

金日成たちは牡丹江に三日間滞在したと言われる。そこで、新義州では鴨緑江の鉄橋が爆破されて、通行不能だということが判った。やむなく再び鉄道に乗車してウラジオストックに出て、そこから海路を取るようになった。金日成らは、ソ連軍船に搭乗して出発し、1945年9月19日に元山に上陸した。元山人民委員会で働いていた人たちが波止場に出迎え出て、初めて金日成を見た人たちは、痩せた若者であったと回顧している。

前記した同行の俞成哲によれば、金日成はこの日、次のような指示を与えた。

「同志たち、今日は秋夕（陰暦8月15日、盆）だが、気をつけてもらいたい。酒も飲んではいならないし、乱れてもいけない。万一人々が金日成に会ったかと尋ねたら、我々は先発隊であり、見ていないが、その方はあとから帰ってくると言え。年齢を聞かれたら、会ってもいないのに判るはずがないと言え」と。隊員等は彼の言動を不思議に感じたことは当然であった。

彼に将来への魂胆があったのか、匪賊の親分が「神秘的な戦術」を持っていたのであった。

『化(バ)けの皮をあらわす』

9月21日、金日成たちは元山^{ビョンヤン}から平壤^{トチュウ}へ向かい、途中事故もあったが翌22日平壤へ入った。
ソ連軍^{シンチュウ}の進駐より大分日も過ぎており、すでに各地には共産党組織が活動し、帰国した人々は工
作する必要はなくなっていた。こうして金日成らは祖国^{ソコク}に帰った。

1960年代以降の北朝鮮現代史では、88旅団は創立以来、遊撃戦^{スイコウ}の任務を遂行するため、
満洲^{マンチュウ}に出撃したと記しているが、それは完全な嘘であり、どの歴史書にも書かれていない。続い
て満洲^{マンチュウ}に最後まで部隊を維持した朝鮮人民革命軍は、ソ連軍とともに対日戦^{ケッキ}に決起し、朝鮮各都
市をつぎつぎに開放したとの記事も、遺憾^{イカン}ながらそれは事実ではなく完全な嘘^{ウソ}である。

ソ連軍の朝鮮進攻を知らされ、その進攻作戦に協力できることを知った88旅団の朝鮮人たち^{コウワン}
の興奮は、目に見えるようである。その準備のための旅団の会合は、どのようであったのだろう
か。金日成たち朝鮮の独立と開放を最終闘争の目標にしている人たちにとって、朝鮮人の「党」
を組織し、朝鮮の開放^{スイコウ}を目標としたソ連軍との作戦遂行の準備に入ったという。実に歴史的な分
岐点^{ギテン}になると思われるが、その点についての具体的な資料は皆無であり、これも嘘^{ウソ}である。

若し私がソ連軍の指揮官であれば、機密^{キミツ}を要するあのような作戦に、訓練は未熟^{ミジュク}で言葉も通じ
ないような雑軍を使用することはない。88旅団とか、パルチザン出身者たちは、朝鮮の上陸作
戦に参加していないことは真実だが、それが北朝鮮現代史では、金日成指揮下の朝鮮人民革命軍
が、ソ連軍とともに敢行したという雄基^{ユウキ}、羅津^{ラシン}、清津^{セイシン}の上陸作戦の状況を記している。私の調査
では清津^{セイシン}は交戦があったようだが、羅津^{ラシン}には日本軍はおらなかった。出鱈目^{デタラメ}である。

北朝鮮現代史では、45年8月に金日成部隊はソ連軍との共同作戦で朝鮮に進攻し、朝鮮開放
を果たして平壤^{ビョンヤン}にいたように記述されている。しかし前頁の通り金日成たちは9月に、北満^イの田
舎町^{ナカマチ}である牡丹江^{ボタンコウ}で大歓迎会が開催されたというから、辻褄^{ツジツマ}が合^アわず虚言^{キョゲン}である。

これも前頁に書いた元山港上陸の時のことだが、金日成は「私は金成柱^{キムソンジュ}」と名乗ったと言う。
金成柱^{キムソンジュ}は金日成^{キムイルソン}の本名で、パルチザン時代には金日成、金東明などの仮名を名乗っていた。だから
朝鮮人民に金日成はソ連^{カイライ}の傀儡^{トクサク}だという印象を与えるのは得策ではないと、考えていたのかも
しれない。どうして本名^{キムソンジュ}の金成柱^{ヤシン}を名乗った^{ノウコウ}のだろうか。不思議であり野心は濃厚だ。

『金日成はなぜリーダーになれたか』

9月19日の元山上陸時に部下に指示したこと（38頁の下方参照）、又、元山上陸時に本名^{キムソンジュ}の金成柱を名乗ったこと（39頁の下方参照）は、天下を取る時に「金日成」の名を挙げたかったからである。それは東満の間島地方に伝わる伝説上の英雄の名前が「金日成」（24頁参照）であったからだ。彼はパルチザン時代には「金日成」のほか、「金成柱」、「金東明」など数種類の仮名を使用していた。祖国に帰還した好機に「英雄」の名を借りて爆発させたかったのだ。

第88旅団の朝鮮人隊員の帰還はスターリンが決定したことだが、そのリーダーの選任は誰が^{カンヨ}関与したのだろうか。旅団内では党書記の崔庸健の方が大隊長の金日成より上位である。しかし^{トウマン}東満での遊撃活動では金日成の方が優れ、88旅団内での隊務や訓練、部下の掌握などは、金日成に才能があったのかも知れない。そして金日成の大隊は朝鮮人が殆どだったから、朝鮮人部隊^{ソウセツ}を創設するとなれば、金日成が指揮官に選ばれる可能性が高かった。

ソ連軍幹部の受けは、他のものよりも金日成が圧倒的に良かった。88旅団時代、金日成は、^{サイヨウケン}崔庸健や^{キンサク}金策より、ソ連軍人とずいぶん親しくしていた。それは、ロシア語で会話がある程度できたからで、そのためソ連幹部には受けが良かった。ロシア語で会話が出来るとするのは強味だ。それだけでロシア人は安心し、ソ連軍幹部も目をかけるようになったようである。

朝鮮でも金日成はソ連占領軍の将軍たちの受けは良かった。そのことが結果として、北朝鮮の指導者になれた最大の要因となったのではないだろうか。金日成は平壤に帰ってきた後、市内の^{ヤンキ}屋敷に住んでいたが、1948年頃までは、その屋敷にはソ連軍の歩哨が立っていたほどであり、ソ連軍将校たちが、金日成に寄せる期待は非常に強かったようである。

88旅団出身朝鮮人幹部の中では、金日成がリーダーとして選ばれるべくして選ばれたという判断であった。ソ連占領下で金日成と指揮権争いをした許哥誼について、次のように述べている。

「許哥誼は党務を担当していた人物で才能のある人物であった。朝鮮労働党を近代的なソ連式の党に組織するために努力して、その基礎を作りあげたのだから実務はできた。しかし人格的に見ても、日常生活からも、とても一国の指導者になれる器量ではなかった。ひどい酒飲みで、酒^{キョクタン}ゲセが極端に悪くなるという人間で、優れた指導者になれる人物とは評価されなかった。

『素顔を見せた金日成と38度線』

朝鮮半島の現代史は、日本の戦後史と比較して複雑である。同じ民族同士の怨念や憎悪からめられた、異様な魑魅魍魎（種々の妖怪変化のこと）たちが跋扈（わがもの顔に振る舞うこと）していた。まさに朝鮮半島は米ソ二大国家が対決し、資本主義・自由主義を標榜する勢力と、社会主義・共産主義で武装した二大陣営の対立を、最も鮮明にしていた「冷戦の縮図」であった。

金日成は元山へ上陸後に平壤に赴き、ソ連当局と協議を経て、朝鮮の大衆の前に初めて姿を現したのは、10月14日の平壤市での歓迎大衆大会の席上であった。実に日本の降伏、朝鮮の開放の日から二ヶ月が経過していた。ここで初めて一般大衆に、北朝鮮の進路を決める指導者の一人に、金日成の名前が知られるのであった。

金日成が主導権を握った朝鮮共産党北朝鮮分局は、新たな運動方針案の中で「民主基地路線」を提唱し、朝鮮半島の北半分を、南朝鮮の開放と東アジア諸国の民営化の基地と位置付けている。この規定は、いわゆる「革命の輸出」の基地の役割と、東西冷戦の前哨基地の役割の双方を、朝鮮半島の北部に負わせるものであった。（京城に本部を置く朝鮮共産党から分離・独立した）

ソ連軍が平壤を占領して司令部を開設したのは、終戦後9日目の8月24日である。その翌日、アメリカ軍は仁川に上陸した。これと平行してアメリカ国内に向けの放送で、北緯38度線をもって米ソ両軍が朝鮮を分割占領する旨を発表した。ここには朝鮮民族の意思は欠片もなかった。

日、独、伊の三国が敗北した後、新たな世界分割戦略に沿って、米ソ二大強国の思惑のみが貫かれているに過ぎず、大国のエゴイズの前には弱小国民族の運命は、余りにも儚いものであった。

それにも況して「金日成神話と個人崇拜の道」は、独創的な粛清と暗殺であった。私が戦後、満洲を旅したとき、同じく満洲を訪れていた満洲開拓団員たちから、現在の北朝鮮の金日成は当時の匪賊の馬隊長（遊撃隊のこと）の金日成とは別人で、ソ連が連れてきた別人だと幾度となく聞かされた。彼ら開拓団員は匪賊と対面した当事者であったが、北満しか経験のない私は初めは信じられなかった。しかし調査していくに従って、別人のバルチザンの英雄がいたことを知った。

「金聖柱」「金成柱」などの幾つかの本名や仮名を使って紛らかし、本当の伝統の英雄とされる金日成に改名したのは、37年（昭12）6月の「普天堡襲撃事件」（28頁）後のことである。

『金日成の歴史の改竄』

高鳳基^{コウホウキ}が党中央に入り金日成^{カイゼン}の秘書室長を勤めたのは、46年（昭21）の暮れから約1年半である。46年8月、朝鮮共産党北朝鮮分局は新民党と合同して北朝鮮労働党を結成し、金科奉^{ケコセイ}が委員長に就任した。副委員長には金日成と朱寧河^{シュネイカ}が選出された。金日成の先輩格になる金一^{キンイチ}が高鳳基^{コウホウキ}に声をひそめて蚊が鳴くように忠告してくれた。「金日成が何を言っても決して言い返してはいけない。彼は顔と腹の中が違ふ男だから」と。【金一は満洲の遊撃隊の幹部で年上の人】

今にして思えば当時の金日成のスターリン崇拜熱は、後年の、前代未聞といってもよい金日成個人崇拜と裏返しの関係にあった。『そして歴史的文献の改竄（竄は悪用するために改めること）を命じて、金日成に都合の良いように作り変えさせた。その後は私を粛清してしまった』

抗日運動組織・祖国光復会（27頁）は、金日成が自らの手で組織したと言われている。1936年（昭11）5月5日のことである。しかし、ここには「二つの嘘」がある。開放前の日本^{カンケンスジ}の官憲筋のよった情報では、金日成が創ったという祖国光復会、実は1920年代（大正9）の初め、民主党の独立運動家によって旧満洲地方で組織されていたのである。間島地方で活動していた反日愛国戦士らだと言う。その時、1912年生れの金日成は未だ小学生だった筈である。

ある矛盾を糊塗（ごまかす）すれば、さらに矛盾が噴出する。嘘はさらに嘘を必要とするのである。金日成が起草したといわれる「十大綱領」とは、まさしく「中国共産党の抗日救国十大綱領」の焼き直しにほかならない。

高鳳基^{コウホウキ}に忠告した「金一」のその後は、朝鮮戦争（後記）最中の50年（昭25）11月に開催された会議で、戦争敗北の責任を追求され、それまでのポストを解任された。金一の捨て台詞は『金日成は、革命とはまったく縁のない男だ』という意味のものであった。

開放前、中国共産党抗日連合軍に属したいた頃^{ヒョウ}の金日成の二人の上官の金日成評は、期せずして一致していた。それは、「彼は屢々上司に告げ口をし、仲間同士の離間策に巧みだった」ということである。又、金日成のテロの最初の犠牲者は日本の大学を卒業した「玄俊赫」であった。金日成が平壤に凱旋した時、彼は既に党の指導者として活躍していたが、金日成は配下の警備隊員を使って狙撃して死亡させ、事件は白色テロだと発表した。このような例は枚挙に遑がない。

金日成の抗日パルチザン闘争は「朝鮮人民革命軍」^{ヒキ}を率いてではなく、中共のゲリラ組織^{ソソキ}である「東北抗日連合軍」^{シチョウ}の師長の一人としてであることが分かった。当時の新聞記事には、「金日成隊」^{リョクダツ}が略奪^{ラチ}、住民拉致、放火など、匪賊^{ヒゾク}と同じような行動をしていたことが報道されている。

「公式伝記」では、毎日のように金日成部隊の戦闘の成果を掲載していたが、事実^{ケイサイ}に反した嘘^{ウソ}の宣伝記事ばかりであった。史実によると1940年（昭15）ごろは、東北（満洲）抗日連合軍は、関東軍の精鋭部隊によって壊滅的打撃を受けて四散しており、満洲では「語るべき戦闘」はなかったのである。そして朝鮮の民族新聞さえ存在しなかった。

抗日連合軍は壊滅して金日成隊も消滅した。金日成は生き残りの数人の部下とともにソ満国境を越え、シベリアに逃げ込んだ。以来1945年（昭20）8月まで、金日成の消息は絶えた。その5年間の空白期間を「偉大なる首領・金日成」^{シヨリョウ}は、党の宣伝機関と国のすべての出版、報道機関を総動員して、彼の都合の良いように埋めさせた。（林隠著「北朝鮮王朝成立秘史」）

林隠はかつては金日成の側近の一人である。伝説であるか実在であるかはともかく、ソ連にとっては北朝鮮を意のままにする国家として成立させるため、遠大な計画から英雄「金日成」が必要であったことは間違いない。そして「最も偉大な抗日闘士」のために、それに相応しい経歴と戦功^{センコウ}が「創作」されていったのである。

林隠が指摘するのは「偉大な思想家」の教育背景への疑問だ。すなわちレーニンよりもスターリンよりも、また毛沢東よりも優れた「世界人民の首領」づくりの第一歩は、金日成の「創業の歴史を」より若年化することであった。レーニンは17才で革命の洗礼を受け、18才で「資本論」の研究に入り、革命組織の指導者になったのは25才であった。スターリンは15才で革命運動に参加し、独学で「資本論」などを研究したと言われる。又、毛沢東は15才で小学校に入學、25才を過ぎてマルクス主義理論に接したと言う。

金日成は5、6才時から侵略者である日本の警察官（大半は朝鮮人）をパチンコで撃ち、8～11才で「主体思想」（後述）を創始してマルクス主義の最高の発展段階に到達し、15才で資本論を耽読した、というのである。林隠はそこで問う。資本論は一体、何語で書かれたものを読んだのか。この書の朝鮮語版と中国語版は戦後に初めて出版されたのであり、嘘^{ウソ}の話である。

『朝鮮戦争』

「朝鮮戦争の準備」

南朝鮮の南労党の武装蜂起は、1946年（昭21）の秋以降のことである。朴憲永らによって指導された蜂起であった。結果は失敗に終わり、南労党の重だった幹部は、38度線を越えて、北朝鮮へ逃亡せざるを得なかった。そして南労党は海州に移された。

「この南労党蜂起に際して、金日成はどのような態度をとったのだろうか」。

蜂起後、形成の不利を悟った朴憲永は、すぐさまソ連軍政部へ支援を依頼している。だが、ソ連軍政部の思惑は別のところにあった。ソ連軍の直接介入といった事態は避けたかったのである。朝鮮人民自身の手によって全土開放、という形をとりたかった。そのため、ソ連軍政部は金日成にあてて、南労党支援を強く要求した。

「支援はおしまない」と金日成は回答している。ソ連軍政部の要望を、正面きって拒絶できるわけがない。しかし金日成は、実質的には南労党を支援しなかった。南の民衆蜂起を見殺しにした。金日成にも思惑があったのである。南の勢力が自力で南朝鮮を開放した場合、朝鮮統一の主導権は南労党の掌中に移ってしまう。金日成にはその懸念があった。金日成の軍隊の力で南を開放したかった。南労党の情勢判断の甘さと冒険主義、そして金日成の傍観によって南の民衆の被害は甚大なものになった。状況次第では、北の革命勢力が必ず駆けつけると信じて立ち上がった民衆は、むざむざと銃弾の下で倒れていかなければならなかったのである。

蜂起の失敗によって、南労党は実質的に潰滅し、北朝鮮労働党に吸収合併された。やがて南労党の人脈は、南のスパイと名目で根絶されたのであった。

金日成は南労党蜂起には傍観を決めながら、南朝鮮の右派民族派の巨頭・金丸とは、親密な書簡の交換をくり返していたのである。開放直後から約3年間、それは秘密裡に行われていた。

南朝鮮では、南半部だけの分離独立を主張する「李承晩」らに対して、「金丸」はあくまで統一朝鮮を実現させようとしていた。そこで金日成はこの金丸を取り込もうとしたのである。金丸を取りこめば、南の右派勢力に亀裂が生じるから、それに乗じて策を立てる。これが金日成の戦略であった。勿論、二人の書簡の交換は極秘中の極秘事項であった。

「1949年はじめの戦争準備指令」

平壤市保安部長の佳奉龍^{チェボンニョン}は1949年当初、咸鏡北道の道党委員長に任命された。平壤を離れる時、金日成^アは私に直接に指示を与えられた。その一つは、「将来有りうる戦争に対処するため、後方基地^{キチ}の建設を進めること」、もう一つは、「咸鏡北道の党組織には、必ずしも党中央と良好な関係にあるとは言えない部分があり、それを是正して組織の規律を確立する」ことであった。

私は清津^{チョンジン}に赴任すると、戦争に備えた軍需産業の育成に努め、交通・運輸網の拡充、海岸線防衛^{ボウ}体制の確立を急いだ。人民の戦時動員態勢も整えた。山積する任務を一つ一つこなしながら、その過程で私は多くの人に会い、忌憚のない意見や要望を聞き、貴重な情報を耳にした。咸鏡北道の市党、軍党の人民委員会の委員長クラス以上の幹部は、大半がパルチザン戦士であった。

金日成^{コウフクカイ}は祖国光復会や民族開放同盟の指導をしたと言っていた。祖国光復会は戦前の資料から、それは虚構であることは知っていたが、実際に祖国光復会に参加して戦った人間の証言は、金日成の指導を否定し、全く知らないと言明した者もいたばかりか、間島の戦闘まで否定した。

さらに恵山事件（28頁）についても、これは金日成の部下の李松雲^{イソンウン}が、金日成の指導を仰ぎながら参画した、と証言しているのだが、やはりこれも虚構であった。咸鏡北道人民委員長までが李松雲の関与を、全くの捏造であると断言した。

日本の官憲に逮捕されたことのある金勳重^{キムリョジュン}という人は、狭い人間関係の土地は周囲の目は冷たかったから、開放とともに平壤に出て、革命勢力の拠点である平壤の地で、人生をやり直そうと思って、食料配給所の職員になった。やがて彼にも運が向いてきた。それは彼が金日成が恵山事件に関係し、嘘であっても金日成が指導したと証言したからであった。

又、開放後になって、祖国光復会や民族開放闘争同盟といった組織が、かつてこれらに参加していた人間を、あらたに集めようとしたことがあったと言う。名目上は、開放闘争に参加した人々を調査する、ということであった。一度は戦列を離れた者も、あるいは途中で敵側に寝返った者さえ、この調査に応じさせたという。時の勢いと言うものだろう。そしてふるいにかけて、一定の条件を満たせば、メンバーと認められ、やがて社会的な出世も可能となつたらしい。

金日成に都合の良い証言を約束する者だけが、陽の目を見ることが出来て優遇されたのである。

「朝鮮戦争の経過」

朝鮮戦争は1950年(昭25)6月25日未明、北朝鮮軍が38度線を越えて南下したことによって開始された。この攻撃は準備、規模、作戦のいずれをとってみても、ソ連による事前の承認と援助なしには実行不可能なものであった。

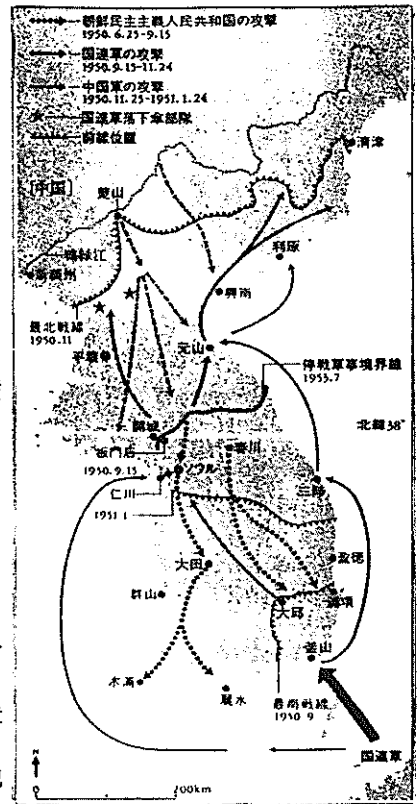
しかし北朝鮮軍南下の背後には、太平洋戦争末期からの朝鮮半島をめぐる米ソの勢力圏争いと、統一朝鮮国家の指導権をめぐる国内的対立が存在し、それらが戦争の勃発に大きな役割を演じたことも否定できない。その意味で、朝鮮戦争は典型的な『国際内戦』の一つであったと言える。

金日成が戦争を北朝鮮の「民主基地」からの民族解放戦争とみなしていたことは、明らかであるが、ソ連がそれを支援した理由については未だに定説がない。最も説得力のある説

明は、前年6月末に完了したアメリカ軍の韓国からの撤退と、1950年初めまでに明確になった対日早期講和および日本の軍事基地化の動きが、スターリンを朝鮮における軍事的冒険に駆り立てたとする極東戦略説である。

しかし、どのような解釈をとるにせよ、それはヨーロッパに於いて失墜した威信(ベルリン封鎖の失敗)の回復、毛沢東に対する立場の強化などの理由と密接に関連していたものと思われる。又、当時のソ連がアメリカとの全面的対決を望んでいなかったことも確実である。

北朝鮮軍の南下に対して、トルーマンは従来の朝鮮への軍事的不介入の政策を放棄し、6月27日には海空軍部隊の投入を、また6月30日には地上軍の派遣を命令した。アメリカの参戦は、形式的には武力攻撃を撃退し、かつ、この地域における国際の平和と安全を回復するという、6月27日の国連安全保障理事会決議に基づくものであり、その軍隊も7月7日の同決議によって国連軍の一部を構成するものとなった。トルーマンはまた朝鮮以外にも、台湾海峡の中立化、フィリピンとインドシナへの軍事援助促進などの措置をとった。



アメリカが朝鮮戦争に介入した理由は軍事戦略的なものであったと言うよりは、政治戦略的なものであった。第①に、北朝鮮軍の奇襲攻撃がアメリカの最高指導者たちに、（ナチスの侵略外交を増長させる結果となった）ミュンヘンの教訓を想起させ、第3次世界大戦を抑止するためには、朝鮮での宥和を拒否しなければならないと確信させたこと、第②に、攻撃が国連監視下の選挙で樹立された韓国政府に向けられたものであったために、北朝鮮軍を撤退させることによって、国連の権威を守護しなければならないと考えられたこと、第③に、中国革命の成功に続いて韓国共産化を座視すれば、アジア地域に於いてだけでなく、全世界的にアメリカの威信が大きく失墜すると判断されたこと、などがその重要なものである。

アメリカの参戦後も、しばらくの間、戦争は圧倒的に北朝鮮軍の優勢のうちに進展し、8月初めには、米韓両軍は半島の南東端に釜山橋頭堡を維持するにすぎなかった。しかし、北朝鮮軍の補給線が伸び切った9月15日、アメリカ軍はマッカーサーの指揮のもとに仁川上陸作戦を敢行し、9月26日には首都ソウルの奪回に成功した。

また、アメリカ軍は10月7日には38度線を北上した。アメリカ軍の北上は同日の国連総会決議に基づくものであったが、明らかに当初の戦争目的である北朝鮮軍の撃退を、北朝鮮の占領へと拡大するものであった。9月初めには、限定戦争の概念を原理的に理解しようとしなかった、マッカーサーや政治的な立場から朝鮮統一を強く要求した国務省極東関係者だけでなく、統合参謀本部や大統領までが、ソ連や中国の軍隊が介入する兆候または脅威が存在しないかぎり、という条件の下で、アメリカ軍の北進を承認していたのである。

戦争目的の変更がもたらした事態は、11月末の中国人民義勇軍の全面的介入であった。この結果、アメリカ軍は38度線以南への後退を余儀なくされ、1951年1月4日、ソウルは再び共産側の占領するところとなった。しかし、アメリカと同じく中国も朝鮮を軍事的に統一する力を持たなかった。これ以後、戦況は二転三転し、同年6月以後、戦線は38度線沿いに膠着した。

休戦交渉の直接的契機となったのは、6月23日のソ連の国連代表マリクの演説であった。しかし、それを可能にしたのは4月11日のマッカーサー解任であった。トルーマンは、鴨緑江北の爆撃、中国大陸沿岸の封鎖、国府軍（蒋介石軍）の朝鮮への投入など、戦争の拡大を主張す

るマッカーサーを国連軍司令官その他の職務から解任することによって、和平の意思を表明したのである。7月10日に「開城」で開始され、その後会場を「板門店」に移した休戦会談は、軍事境界線や捕虜交換の問題で難航し、戦闘が継続する中で2度にわたって全面的に中断されたが、53年（昭28）7月27日に最終的な合意に到達した。しかし、休戦に反対する韓国の李承晩大統領は協定への署名を拒否し、反共捕虜を一方的に釈放することによって、それに抗議した。休戦協定への署名者は金日成（北朝鮮）、彭徳懷（中国）、クラーク（米国）である。

朝鮮戦争の歴史的意義について付言すれば、その最大なものは、それが東西冷戦の軍事化と世界化をもたらしたことである。トルーマンは戦争を契機に「国家安全保障会議文書68号」を承認したが、それは当時130億ドルであったアメリカの年間軍事予算を、一挙に350億ドルに増加させ、ヨーロッパからアジアにまたがる反共軍事包囲網の形成を、企図するものであった。

又、戦争は朝鮮の分断を固定化し、台湾の軍事的開放を不可能にし、その後20年に及ぶ米中対決の原型を形成した。アメリカのベトナムへの介入も、その影響のもとで実行に移された。

さらに、戦争が日本の戦後の歩みに与えた影響も大きかった。それは早期講和と日米安保体制を決定的なものにするとともに、アメリカ軍の日本での緊急調達（特需）は急激な需要増大をもたらし、戦後経済復興の原点ともなったのである。又、自衛隊の前身である警察予備隊は、朝鮮戦争の開始直後の1950年（昭25）8月に創設されている。

「南北朝鮮の戦禍の傷痕」

朝鮮戦争が南北朝鮮にもたらした物的・人的被害は甚大であった。戦線が南は洛東江から北は鴨緑江まで、あたかもローラーをかけるように移動したため、軍事施設・戦略拠点のみならず、民間施設や民衆が被った直接の被害は甚大である。数量的に正確なものは把握が困難だが、さらに人的被害は深刻で、同族同士が相争った戦争は、朝鮮人だけで南北計126万人に及ぶ死者を出し、離別・死亡・孤児の大量発生などにより、現在も1000万人（南北総人口の1/5）といわれる離散家族を生み出した。

同時に戦争以前から推し進められた南北両国家の異質化は、この戦争を経て決定的なものとなった。南で非合法化されていた共産主義者や左派人は越北し、北の地主やキリスト教徒は大量に

越^{エツナン}南^{カンレン}したことも関連して、休戦ラインをはさんだ南北の不信・憎悪は増幅^{ゾウオ ゾウフク}された。

北朝鮮は南朝鮮を「米帝の占領下」にあるものとみなし、又、李承晩政権下の韓国は北朝鮮を中^{カイライ}ソ^{メツホク}の傀儡^{ホクシントウイン}とみなし、滅北・北進統一^{ヌグ}を叫ぶなど、相互不信は拭^{リショウバン}いがたいものとなった。

戦争がもたらした南北分断体制^{ブンダンタイセイ}の固定化^{コクフク}をいかに克服^{カダイ}するかが、当時の民族的な課題となったが、現在でもエスカレートするばかりで南北の和平は至難^{シナン}であり、合併^{トウテイ}などは到底考えられる問題ではない。南の韓国は反日思想の強烈だった李承晩大統領が去^{リショウバン}って以来、自由主義国家の一員として我が国と友好関係にある。一方の北朝鮮の金日成^{キムイルソン}は死亡^{ヒソク}したが、匪賊出身^{セシユウ}が世襲王朝を建国^{キムジョンイル シュリョウ}して長男^ツの金正日^{ドウホウ}が首領^クを受け継ぎ、核兵器までも保有するようになった北朝鮮は、多数の我同胞^{ラチ}を繰返し拉致^{ラチ}することは許しがたく、勿論、国交は未だない状態が続いている。

「私と卓月魚羊戦争」

大東亜戦争^{ダイトウア}の三大激戦地^{ゲキセンチ}と言われたビルマ（現ミャンマ）戦線に於いて、北九州部隊を指揮する歩兵大隊長^{シザンケツカ}として屍山血河^{チク}の戦場を馳駆^{カカリ}し、通算3度目の受傷^{キョウシ}に拘らず九死^{イヤショウ}に一生^エを得て帰還^{キカン}した。しかし私等を待ち受けていた国家の法令は、「公職追放令」^{コウシヨクツイホウレイ}という悪逆非道なもので、職に就くことは許されない罪人扱いで、路頭^{アツカ}に迷う高等ルンペン^{ロトウ}（浮浪者^{マヨ}）生活であった。尊い生命^{フロウシャ}を捧^{トウト}げて国家に奉仕^{ササ}した軍人は戦時中の若者^{ホウシ}たちの憧れの的^{ソカモノ}であったが、敗戦の原因は軍人^{アコガ}として、我々現役将校^{マツ}をマスコミ^{ゲンエキショウコウ}は新語^{ベッシ}を造^{マナコ}って職業軍人と称し、社会は蔑視^{ミョウシ}の眼で眺めていた。

朝鮮戦争が勃発^{ボツパツ}した時には私は故郷^{ミス}を見捨てて石川県に移住^{イジュウ}し、ビルマの戦闘の延長戦のようにして、生活のために丸裸^{マルハダカ}になって菜種油^{ナクネアブラ}の搾油^{サクユウ}に精を出していた。朝鮮戦争勃発すると間髪^{ボツパツ}を^{カンハツ}入れず、舞い込んできた令状^{レイジョウ}は「公職追放令解除」^{コウシヨクツイホウカイジョ}の令書^{レイショ}であった。それに引き続き舞い込んで来たのは、「警察予備隊」（自衛隊前身）からの「幹部入隊勧誘書」^{カンユウシヨ}であった。「旅費日当支給」

と書かれていたから、東京・越中島の本部に出頭したが国は勝手なもので、今まで追放しておきながら朝鮮戦争が勃発して米軍が出動するや否や、警備力補充のため我々に入隊を依頼してきた。

激戦場^{ゲキセンジョウ}で死以上の責任^シの重圧^{ジュウアツ}に苦しみ悩んだ指揮官経験者は、二度と同じ経験はしたくないの^{ナヤ}が心理^{シンリ}である。同期で入隊勧誘を受けた50名の内、入隊した者は10名内外で、激戦体験者の入隊者は皆無であった。あの朝鮮戦争は私にまで影響^{エイキョウ}し、その記憶は今でも脳裡^{キョク}に刻まれている^{ノウリ}。

『金日成の肅正開始』

朝鮮戦争とは一体、何だったのかと問われれば、私は東西冷戦を象徴する最初の武力衝突だ
たと答えるだろう。北朝鮮軍の奇襲に始まり、アメリカ軍の仁川上陸、中国義勇軍の参戦と続き、
朝鮮半島はブルトナーで踏みにじったように焦土となってしまった。

金日成が潰滅的な退却戦のショックから立ち直ったのは、彭徳懷の指揮する中国人民志願軍が、
米軍を38度線以南に追い出した後のことである。しかし戦争の結果、南北朝鮮を合わせて百二
十六万人の死者を出し、一千万の離散家族が生まれたのであった。

朝鮮戦争は東西両陣営の戦後戦略の最初の実験場であった。この戦争を契機に東西対立は一挙
に世界的な規模へと広がり、この時から約40年間も世界は二分して抗争を繰り返したのである。
第二次世界大戦が終わって僅かに5年に過ぎず、平和を崩壊したのが馬鹿な朝鮮戦争であった。

金日成にとっては大きな試練であった。当初の目論見とは余りにもかけ離れた結果に対して、
自己批判は避けられなかった。「我々は米帝国主義のような強大な侵略者と戦争を継続する十分
な条件を作れなかった。我が軍の歴史は浅く経験も乏しいため、組織は脆かった」と、敗北を総
括している。そして戦争に敗北した権力は、歴史的に弱体化する筈であった。

この危機を金日成は「肅正」という武器で乗り切るのであった。戦争敗北の責任を政敵に転嫁
しつつ、逆に権力を増大させたのである。肅正の嵐は、その風が強ければ強いほど、自己の勢力
が強くなって行ったのであった。恐怖政治と言われるのが、それである。

「肅正」とは、戦争敗北の責任を転嫁することが目的であり、その元祖は共産党の独裁者であっ
たスターリンであり毛沢東であった。金日成も先輩独裁者に習らって、戦後直ちに実行に移した。

まず最初に組上にのぼったのは、前線司令官の「金策」であった。敗戦総括の論争の趣旨は、
いつも明解である。「敗北の責任は、最前線にある司令官の指揮に誤謬（誤り）があったのだ」、
と金日成はそうように金策を批判した。これに対し金策は、「党中央すなわち金日成の命令どお
りに戦っただけだ」と反論した。すると次のような金日成の名論（迷論）が生まれた。

『私が各戦線全般の何を知っていると言うのだ。金策は「とにかく追い出せ」と貴方がそれだ
け命令しただけで、私はそのように戦ったつもりである」と言って、開き直った。これを聞いた

金日成の口から、次の言葉が飛び出した。「いつ私が^オ（追い出せ）と言ったか。（勝利せよ）と言っただけだ』と。誠に次元の低い応酬であったと言う。

「それでは、貴方の勝手にしてください下さい」と言って、金策は黙ってしまった」。この論争のあってから暫くの後、金策は自分の執務室で死体で発見された。

「武亭」もまた金日成の政敵であった。彼への批判の眼目は、誤った作戦命令である。しかし武亭は中国紅軍の彭徳懷とは「長征」（中国共産軍の長期間の退却のこと）時代からの戦友で、注意以上は追及はしなかった。

「金一」の場合は激烈であった。江界に後退した金一が「許哥誼」に語った言葉を、金日成が問題にしたのである。「われわれは飛行機がなくて敗けた」と言った言葉が、金日成の逆鱗に触れたのであった。敗北主義だと攻め立て、会議に参加した人たちの面前で、金一の階級章をむしり取り、その場で解任してしまった。このような例は枚挙に遑がないから省略する。

労働党中央第3回全員会議では、党員の規律強化の方針も打ち出したが、その結果、60万党員のうち、45万人が処罰の対象とされた。その結果、全党に暗雲がおおい、党員の恐怖心を掻き立てた。敗戦の責任から発生した権力の危機を、規律強化の名目で回避する、つまり「肅正」によつて権力の維持を図った、典型的な金日成の手法である。

金日成の「規律の確立」の提唱の狙いは何処にあったのかは、上記のような「肅正」であった。さらに肅正と平行して、金日成は自らの略伝を作成させた。『金日成略伝』は、かつてスターリンがそうであったように、金日成個人を『神格化』してゆく狙いであった。金日成略伝は「聖書」として扱われた。しかし歴史は教えている。「聖書」と謳われた人物伝などは、所詮は作りあげられた「偽伝」であり、恰かも本物の如く輝く金メッキの彫像にすぎない。

偽りは、やがて、その素顔が露われる。一時期、大衆を欺くことはできるだろう。一個人を生涯にわたって騙し続けることもできるだろう。しかし大衆を長期間、欺き続けることはできない。

「伝説的英雄」「民族の太陽」と言った讃辞を個々の党員、国民一人一人が、朝から晩まで唱え続けねばならなくなった。そして題目は繰り返すほどに実質を失って行つた。金日成への讃辞は労働党員と北朝鮮人民にとって免罪符となった。肅正されないための「踏み絵」であったのだ。

ジャ マ 「邪魔者は消せ」

1945年10月14日、^{ピョンヤン}平壤に於ける歓迎大会の大衆の前に姿を現した金日成は、帰国早々から権力の^{ジョウアク ヤシン モ}掌握に野心を燃やし、朝鮮戦争の前後を問わず邪魔者は消すべしと、手ごわい論敵、政敵を、^{メイモク マッサツ}いろんな名目をつけて抹殺したばかりでなく、将来その可能性のある者まで権謀術数を^{ケンボウジュフスウ}弄して除去、^{ロウ}粛正してきた。「^{シュクセイ}粛正」とは多くの敵から自身を守るためであった。

開放後、平壤に終結した政治活動家たちは、「ソ連派」「中共派」「南鮮派」「民族派」「国内派」「抗日パルチザン派」があった。それらの各派は必ず対立して葛藤することは目に見えていた。その際、金日成の何よりの利点といえば、前記した通り、スターリンを始めとしたソ連派が、予期しない大きな力となって支援してくれたことであった。

金日成は自己保身、野心達成のための手段として、^{ホシン ヤシン}粛正という「^{マヤク}麻薬」を知っていた。金日成の粛正が本格化したのは、朝鮮戦争をきっかけに1950年代である。真っ先に中国東北部に逃げ込み、ソ連に越境し、その間のことを知り尽くしている者は邪魔者であり、「^{カッタウ}不純分子」「^{フジュン}卑怯者」「^ヒ異質分子」などと称して、^{キョウ}粛正という恐怖政治の体制を固めていった。

ソ連帰りのパルチザンというか、満洲の匪賊か馬賊の出身者が、思いがけなく掴んだ権力の座^{ツカ}に坐ると、彼の脳細胞は「^{スワ}遠大な計画」を思いついた。それは、「^{タイソウ}金日成を太宗とする一族の^{バン}万世一系化」であった。総仕上げのためには金日成よりも能力があり影響力もある者^{ユウイ}優位に立つと予想される者などは、刃向かうだろうと懸念して「^{ハム}血の^{ケネン}粛正」を断行した。

1953年3月のスターリンの死去から3年が経過した56年2月、共産党大会に於いて、時のフルシチョフ書記長は、スターリンの個人崇拜と権力の^{イッキョクシュウチュウ}一極集中について批判報告を行った。これは公開されない「^{ヒミツ}秘密報告」であった。ソ連共産党員が正式の党の方針として、個人崇拜批判を知らされたのは3ヶ月後であった。金日成の場合は直接的な影響があるだけに深刻であった。

若し北朝鮮にまで反個人崇拜運動の火の粉が及んでくれば、到底、金日成体制は維持していくことは出来ない。これが金日成自身と側近たちの認識であった。反個人崇拜運動の波及を食い止めるために、側近^{チエ}立ちは知恵を^{ニシキ}しばった。基本的には規律の強化と、思想の締めつけ対策に頼る^{ハキユウ}しかなかったのである。思想闘争に名を借りた忠誠心の強要であった。

『嘘と肅正で固めた金日成王朝』

現在の北朝鮮は金日成の死去から、息子の金正日が「世襲」によって政權を受け継いだ。これは社会主義国家では異例で、あるはずもない世襲が強行されたのは、北朝鮮が金日成の独裁国家であったからであろう。所謂、「金日成王朝」としては当然の結果であった。

その「金日成王朝」の成立は、金日成の登場から独裁化までの「邪魔者の肅正」に始まり、さらに「神格化」によって形成されてきた。その金日成ほど謎に包まれた人物も珍しい。これまで公開されてきた資料では、虚像と実像が、さまざまな形で入り混じり、正体（実像）は二重、三重に隠蔽されている。だから私の能力では、これまで記述してきた中で、それを十分に書き尽くされていないのは当然である。その巧妙に隠された謎には次のような理由があるようだ。

①は、金日成自身による正体隠しが意識的に行われた。それは彼自身が両親、兄弟、親戚等について、直接的に言及したことが全く無いと言う事実がある。

②は、金日成の神格化、絶対化の過程で、金日成の取り巻き連中らによる過剰忠誠、すなわち実像を修飾した虚像を肥大化していく中で、肝心な実像に霞がかけらりてしまったことである。金日成の実像正体を承知しているのは、ソ連と中国ではないだろうか。

北朝鮮では金日成に関する書籍が発行されているが、経歴などの全てが捏造されているから、信用されないとされている。金日成の本名は「キム・ソンジュ」であるが、漢字では「金聖柱」「金成柱」「金誠柱」と表記されている。そのいずれも金日成本人が解放以後、一度以上は、これが自分の本名だと言明した事実があり、文献にも明記されている名前である。

通名ばかりか本名にも疑惑がもたれるのは当然である。果たして、どれが金日成の本名なのか、本当の本名以外の偽の本名は、本当に偽なのか、判断することは非常に難しい。

満洲時代に金日成の名前が伝播されたのは、日本軍や警察が自分たちの討伐の戦果を誇張して宣伝した結果であろう。日本人農業開拓団の人たちが私に話してくれた話が本当のようである。すなわち、彼らは金日成は偽者であると断言していたのであった（24頁参照）。それにもう一つ強調したい点は、今日でも彼の金日成をホン者だったのか、偽者だったのかと論議することは、金日成を偶像化する運動を、より一層、煽動することになり兼ねないということである。

イムイン シ・リョウ ヨウリツ
かつて金日成の側近であった林隠は首領の擁立の先頭に立った人だが、後に肅正の魔手を逃れて
ショウタイ コクハツ
ソ連に亡命した。金日成の「正体」を知ってから коммуニストとして告発し、金日成の抗日闘争
ウソ
の嘘をあばいている。

一方、伝説であるか実在であるかはともかく、「ソ連」にとっては北朝鮮を意のままにする国
マチガ
家として成立させるために、英雄「キム・イルソン」が必要であったことは間違いない。そして
ショウカイ
「最も偉大な抗日戦士」（平壤・歓迎大会でのソ連・ロマネンコ少将の紹介）のために、それに
センコウ ソウサク
ふさわしい経歴と戦功が「創作」されていったのであった。

北朝鮮で発表された金日成の「公式伝記」は、1952年4月15日の「労働新聞」の記事が
最初で、以後、数回の改正が行われ、1972年4月には金日成の60才の誕生日を記念して、
リョクデン サクジュ サ カ
「金日成同志略伝」が刊行されている。実はこま両者の記述には、各所で削除、差し替えがあり、
ツツツマア カイサク ウカガ ムジュン シツビツシャ
辻褄合わせの改作や「栄光」のデッチ上げが窺われるのである。それらの矛盾は、その執筆者を
ケツチャク
肅正することで決着させている。

1961年9月の労働党第4回大会で、金日成は「我が党指導部は不純分子を完全に除去し、
テッビ
鉄桶のような団結ができた」と報告し、肅正の勝利をうたいあげた。金王朝の成立宣言である。
モウイ メンミン
そして、この大会に列席した主流派というのは、肅正に猛威をふるった面々ばかりで、金日成の
チュウセイ ツ
かつての戦友であり、金日成に忠誠を尽くしてきた連中ばかりであった。

しかし5年後の1966年秋、金日成は「階級闘争の徹底化」という名目で、この盟友たちの
テツテイカ メイモク メイユウ
肅正に手をつけた。王朝成立のためには身近にいる者にも警戒し、邪魔者に仕立て上げている。
ジャマモノ シクテ
というのは、金日成が一手に掌握している権力を、息子の金正日に世襲移譲しようとする時、反
セシュウイジョウ
対の立場を取るかもしれない最後の「敵」であったからである。

チヌ コウス ギソウ ウソ
血塗られた金日成王朝の肅正の構図は、自らの経歴を栄光あるものに偽造した嘘と、その上に
ドクサイ イジ コウケイセシュウ
築かれた独裁絶対権力の維持、そして後継世襲の強行のために、邪魔者、実力者らの「内なる敵」
ウソ カタ ネツゾウ
を排除した。そこには「正統性」と「革命の伝統」を強引に確立させようとしてきた金日成の、
嘘で固めた「歴史の捏造」が明らかに見えるのである。※※この稿を書いていたのは2003年
3月20日午前11時、「米英」は「イラク」に対して宣戦布告した時であった。我ら戦闘体験
者は戦争は絶対反対。『ならぬ堪忍、するが堪忍』『堪忍は一生の宝』の諺を贈り届けたい※※

『金日成の神格化』

金日成の神格化、絶対化は、金日成の死後もそのまま、唯一の権力世襲後継者である息子の金正日に引き継がなければならないからである。そして、金日成神話をはじめとする神格化への密かな計画が北朝鮮社会で作られ、広められていったということは、北朝鮮が外部と遮断され、密閉された中で、国家統制のもとに一元化されていることに起因している。

「金日成神話の創作」(一例を挙げてみる)

「金日成同志は、白頭山の精気を受けてお生まれになった方で、天の竜馬にお乗りになって、白頭山で日本の軍隊を撃滅した伝説的な英雄であられる。天地造化の一切を見抜いておられ、縮地法を用いられて広い空を所狭しと思うままに飛び回られる。金日成首領さまは、天の遣わした万古の英雄であられる」。この神話は、1974年10月17日付の労働新聞記事である。

個人崇拜の行き着くところは、科学性、合理性を主張する社会主義は無視され、金日成主義という「宗教」のもとに、生き神さま金日成の「神話」がまかり通るのである。彼は我々と同様に日本国民であった時の天皇制を模倣し、自分を「神」の存在として君臨したかったのであろう。平壤市にある金日成の出生地とされる「万景台」には、今日でも毎日、見学者の長蛇の列ができるという。市民、近郊、地方から繰り出された団体のほか、一時帰国の在日同胞、訪朝外国人も、必ず一度は案内されることになっているらしい。

又、北朝鮮各地にある大小3万もの金日成の銅像の前では、立ち止まって最敬礼することが義務づけられており、党大会から職場集会に至るまで冒頭に直立不動の姿勢で、金日成及び金正日への賛歌を歌わなければならないという。そして公的な施設は勿論、どの建物や工場、農場、各家庭にも、金日成と金正日の肖像画が飾られ、学習や労働の前後に「感謝」の心をこめて敬礼しなければならない。明治から敗戦までの日本の天皇と同じく、「神」として君臨している。

「主体思想」(43頁参照)

「金日成著作選集」に「主体主義」を次のように書いている。「人が凡てのものの主人であり、凡てのことを決定する」ということが基礎であり、「偉大な首領さまが創始された永久不滅の思想が、主体思想」だと述べている。独裁政権のために打ち出された手段と言えるだろう。

『世襲の金正日』

万世一系の「金王朝」を建設するためには、世襲の後継者を絶対化させなければならない。そのために歴史を作り替え、金日成は自らを「神格化」した。しかし世襲後継者を自分から言い出すことはできず、他の推挙を得ることで正当性を得ようとしたのであった。

1973年9月3日から7日まで、非公開で中央委員会全員会議で金一首相は、「金正日同志を偉大な首領さま金日成主席の後継者に提案したい。金正日同志は思想的な武装もしっかりしており、若いとはいっても党業績及び人物は、金日成主席に比べても見劣りしない」とブチ上げた。勿論、誰一人も反対するものはいない。否、反対できる訳がない。しかし公表しなかった。

それは社会主義国家として宣伝し、認識されている北朝鮮としては、たとえ信奉されている権力者の実子であっても権力が世襲されるような例は、友好諸国に認められる筈がないからである。

そこへ「白頭山伝説」までが登場した。「日帝支配の時、白頭山の上空に將軍星がきらめいていた。前の方でより明るく輝く將軍星は金日成將軍さまであり、そのわきで慈愛深く、そして、優しい光を放っている女將軍星が金正淑女史（金日成の妻）で、その間に聡明な光を放っていた子供星が、親愛なる指導者「金正日同志」であった。（88年金正日の誕生日前日の平壤放送）

これは全く笑止千万、人を馬鹿にした野蛮な発想で金正日の権威を人為的に造作したものである。

金正日の神格化は、父の金日成の抗日パルチザン闘争の「輝かしい栄光」と同様に、計画的な「正体隠し」から始められた。その第一が出生地の「秘密」であった。金日成と金正淑の結婚は35頁の通りで、金正日の誕生も36頁の通りソ連領内であった。しかし金正日の神格化のために北朝鮮では、「白頭山山麓にある三池淵付近の、密林にあるパルチザン根拠地で生まれた」としている。そこに丸太小屋を造って、傍らに「誕生記念碑」を建て一帯を「聖地」化している。

これは、金日成の抗日革命活動の根拠地であったと主張する、白頭山で出生したということによって、「運命的」に金日成の唯一の後継者になるように、定められていたことを人々に訴えるためと、韓民族の聖山である白頭山で出生したことで、民族の指導者になる資質が備わっていることを誇示するためであった。金日成の抗日活動拠点は「眉唾物」であり、金正日の白頭山出生も、世襲後継に反対の可能性のある者は既に東正済みで、神格化が図られていたのである。

『金正日の神格化』

金正日キムジョンイルの「二代目首領」シュリョウ ニンテイの認定は前頁に記述した通りで、金正日の地位は一応、党中央委員会書記局十人中、金日成につぐ第二位とった。地位が定まると、たちまち金正日の「神格化」イデオが洪水のごとく進められていった。

先ず第一に、本名の「正一」ジョンイルを「正日」ジョンイルに改名した。ところが驚くべきことに、北朝鮮の全住民に対して「正日」の名を付けることを厳禁し、現に「正日」の名を持っている人には改名命令を出したのである。これは他に例をみない乱暴な布告であった。このとき同時に、すでに亡き母親の金貞淑キムジョンスクの名を「金正淑」ジョンスクに改名した。これも発音は変わらない。金正日の名はつまり、父から「日」の字をもらい、母から「正」の字を戴いたことにしたのであった。

古今東西を問わず、独裁者は自己の出自を隠蔽したり、あるいは誇大誇示し、捏造する傾向があるようだ。北朝鮮の金日成もその例に漏れず、この様相は金正日登場後、特ににはなはだしい。それが本人だけでなく、父母、一族にも及ぶのが、金日成王朝の特色である。

1982年7月31日、金日成の亡母である「康盤石死亡五〇周年」行事が、北朝鮮労働党・政府共催で盛大に行われた。これ以前にも、金日成の亡父「金亨稷死亡五〇周年」や、叔父である「金亨権死亡四〇周年」が開かれている。独裁者家系の死亡周年行事が、政府や党の主催で行われるというのも、あまり他に例を見ないことだろう。

金日成一族への賛辞は、金日成の曾祖父から祖父、父、叔父につながる父系は言うまでもなく、外祖父につながる母系はもちろん、金正日の母に及ぶまで広範囲にわたり、権力の座を中心とする「神聖家族」化がすすめられている。

金正日が後継者として登場するや、亡き母親「金正淑」に対する異常な「絶対化」が始まった。1974年初め、金正日の指示によって、金正淑の「回想記」を北朝鮮全住民に学習することを強要し、金正淑を主人公とする「革命歌劇」を創作させて、全国で上演することを指示した。

金日成一族の輝かしい経歴と血統についての自慢は、凡そ嘘と創作でデッチ上げられたものだ。万世一系の「金氏王朝」を連綿として継いでいこうとする野望は、中国の「明朝」「清朝」を真似たのか、日本の天皇制を真似たのか、世の中は「そう甘くない」と言わなければならない。

『不可解な国・北朝鮮』

東北アジア諸国は、金日成・金正日の父子二人に支配されてきた北朝鮮を、大きく眼を開いて
チュウシ ハンイ
注視している。これまで、この国のさまざまな事情を私の知る範囲内で記述してみたが、「朝鮮
フサリ コウ
民主主義人民共和国」という国家は、その名に相応しい国家であろうか。人民が権力を所有し行
シ カカ アタイ ハク ナカヨ
使する「民主主義」を掲げるのに値しているだろうか。果たして国民が仲良く共同して事を行う
キョウワ ソム
「共和」制であるだろうか。「前者」は、主権が国民ではなく自由平等の原理に背いており、ま
た「後者」は、共和制に正反対の世襲による独裁・君主制である。極端に言えば、国民の「生き
モノモウ ハクダツ メイヨ
る権利」と「物申す自由の権利」が剥奪されている国家である。名誉ある国家の名称は不可解で
ネツソウ ウソハッピーク
あり、捏造した嘘八百の歴史の上に成立している。

私が1938年（昭和13）に初めて朝鮮半島を縦貫し、国境を通過して匪賊の頭目「金日成」
ジュウカン ヒソク トウモク
の名前を知った。日韓併合に反対して抗日運動に身を投じた気宇壮大な青年の心理は、理解でき
キウソウダイ
るものの、戦後の野心から、抗日闘争の歴史は全てを嘘のラップで固め、何処にヒントを得たの
ヤシン ウソ カタ ドコ エ
か、統治者が独断で政治を行う「専制国家」の「開祖」に君臨した。私は驚いて天を仰いだ、
トウチンヤ センセイ カイツ クンリン アオ
これも亦、過去の英雄の名を借りたのであった。それが『嘘から出た実』の諺の通りになった。
マタ ウソ マコト コトリザ
これも亦、過去の英雄の名を借りたのであった。それが『嘘から出た実』の諺の通りになった。

北朝鮮には「国家」としての「倫理観」〔人として守るべき道（道徳）〕があるのだろうか。
リンリカン
戦後の北朝鮮の行為は、統治能力を欠く者たちが行う「蛮行」以外のなにものでもない。国家の
カ バンコウ
信用は、その倫理性によってかちとるべきものであろう。
リンリセイ

金日成が北朝鮮に君臨した期間は、約46年間に及ぶが、そのうち20年間は、後継者の育成
ツイ キ イセイシャ
に費やしてきた。金正日が32才の時に国家の方針として彼を後継者に決め、未来の為政者とし
テイオウガク
て金正日に帝王学を学ばせてきた。そして現在、金正日体制を支える側近もまた、金日成体制の
ウソ ホウベン
中から育ってきた軍人、官僚たちなのである。私に言わせれば「嘘も方便」の体制である。

金正日体制には、間違いなく金日成のあらゆる処世術が、一貫して凝結している。そういう意
マナガ ショセイジュツ イヤカン ギョウケツ
味からすれば、金日成を知らずして、金正日を知ることとは不可能であると言えるだろう。

スウジクコク
ブッシュ米大統領をして「悪の枢軸国」と呼ばしめた、現北朝鮮の独裁者「金正日」は、父親
ミトド ヨ ミ クビタク
ほどカリスマ性に欠けているが、革命第二代を最後まで見届けられずに私は黄泉に旅出つだろう。

『あとがき』

北朝鮮・平壤放送は1994年(平成6)7月9日、正午から金日成の死去を報じた(享年82才)。しかし、我々を初めとして世界の耳目は息子の金正日に集まった。それは第二次世界大戦の終結に続く「どさくさ」の中で、何処から降って湧いてきたのか、金日成は民衆の上に強圧的に居すわり、「金氏北朝鮮王朝」の基礎を築き上げてしまったからである。

金正日が父・金日成の後継者と決定されてから、すでに20年が経過していた(56頁)。1973年、党政治委員に昇格した金正日は、党の決定として金日成の後継者と決まった。当時、金正日は32才である。しかし正式に国民は権力の世襲を認めるかどうか注目していた。

社会主義国家で権力の世襲は異常である。全世界が権力の世襲を異常だと捉えていることは、金日成も分かっていた。分かっていたから、中国やソ連などの友党にも事情の説明に赴いている。

では金日成はなぜ敢えて異常だとされる権力の世襲に踏み切ったのか、さまざまな推測がなされている。中でも説得力のあったのは、他の社会主義諸国に見られたような権力の交替期に起こる動揺を、世襲によって未然に防ぐためだと言う説のようである。北朝鮮での権力の世襲に就いては国民はそうのように理解させられていると言う。中世の封建政治に逆もどりである。

前記したように私が金日成の名前を知ったのは1938年(昭13)の満洲であった。その後、私は中国大陸戦線に従軍し、ビルマで終戦を迎えたから、彼の名前は忘却の彼方の存在であった。戦後、彼は特別な地位、身分、権利を持って表舞台に現れた時には私は吃驚した。匪賊の頭目が君主の地位に就いたのである。それも本名の「金成柱」を偽って伝説の英雄「金日成」を名乗り、「狂人国家」を建国したのであった。日本の天皇制の世襲にヒントを得たのであろうか。

世界の建国の歴史を繙いてみると、歴史は凡て権力者の歴史である。権力者の都合の良いように作られている。そこに嘘で固めた神話が作られ、嘘八百の伝説が生まれてくるのである。そのために強烈な肅正に次ぐ肅正を断行し、己を神格化して金氏王朝を建国したのであった。

民主主義の根本理念は、いっさいの人が平等と認められ、平等な機会を与えられ、平等な権利と義務を有することにある。民主主義は人民の政治であり、人民が政治の主体となることである。つまり主権が人民にあることだが、北朝鮮は全てが金体制の護持のための独裁政治である。

この機会に南北朝鮮が言う「日本の植民地統治36年間」に就いて、書き遺しておきたい。彼等は「日本による植民地支配が悪かった」と残酷を強調し、「過去の清算」がされていないと非難している。しかし、それらは悉く歴史的に反し、事実を歪曲していると反論したい。

1910年(明治43)8月に調印された条約は「日韓併合条約」である。『併合』とは、幾つかのものを一つに纏めることを言う。『植民』とは主として国外の領土や未開地に自国民の移住・定住を促し、開発や支配を進めることである。『併合』と『植民(地)』とは字の解釈からも明らかに意味が異なり、その点を先ず理解しなければならない。

我々年代の者が体験した日韓併合は、日韓合併又は日韓合邦とも言われた通り、合わせて一つになることで、同じ日本国民であったのである。だから強制連行など、ある筈がないのである。

「植民地」とは戦前のビルマ(現ヤンマ)、仏領インドシナ(現ベトナム・カンボジア・ラオス)蘭領インド諸島(現インドネシア)、英領インド・英領マレー半島(含シンガポール)等のことを指し、植民地と併合は全く異質で、世界の権威ある文献でも「日韓併合」と表現している。

植民地でなく、日韓併合だったからこそ両国民は一心同体となり、差別なく日本国籍を持ち、日本国民としての権利・義務を持つようになった。反対に上記した英国・仏国・蘭国の領土となった植民地の住民たちは、英国民・仏国民・蘭国民となったのだろうか。ただ搾取された被圧迫民族となっただけで、朝鮮半島人が日本人になったような待遇はされなかったのである。

終戦となり私が帰国すると、朝鮮半島の人々は恰かも戦勝国のように振る舞っていたのには慨嘆させられた。それまで「同じ国民」として権利義務の全てを「共有」していたから忘れられない。

彼等の国では、「日韓合邦」以前の李氏朝鮮王朝時代がいかに貧困であったか、王朝末期は国が崩壊寸前であり、生き地獄のような時代であったことを教えていない。その通りだったからこそ世界各国は日韓合併を承認したのであった。私の陸士時代の北朝鮮出身の同期生は当時の半島の人々は日本に憧れ、本心から日本人になりたかったと証言していた。

彼等の戦後の教科書では、自分たちが独立運動を展開して日本と戦い、独立を勝ち取ったという事になっている。だから戦勝国だと豪語して賠償金の要求を主張するのである。戦後賠償と言うけれども、日本が投資をして遺してきたものだけでも釣りがくる位だ。日本が鴨緑江に開設

した発電所だけでも莫大な金額である。その他、鉄道もあり、豆満江開発など枚挙に遑がない。

日本は内地以上の産業投資を行ったため、戦前の時点でもかなりの経済成長を遂げていた。だからこそ人口も増加し、特に「教育関係」の投資は莫大であった。義務教育を内地並みに実施し、最高学府として京城帝国大学までも開校している。それらは台湾も同じであったから、「李登輝」前台湾総統は日本に感謝しているのではないか。朝鮮半島の人たちに恨まれる理由は全くないと私は思っている。その点は北朝鮮出身の私の陸士同期生も大いに感謝していた。それは本心からであり嘘・偽りではない。私は戦後の日本の高度成長に対する嫉妬が最大原因と推察している。

問題の「創氏改名」は戦時中、私の在中国時代の経験から、朝鮮人名だと中国人に軽蔑されるから、自然に創氏改名した事実を私は経験している。金・李・朴・崔の姓だけで人口の五割を占めていたから紛らわしく、日本人に懂れて改名が自発的に進んだのは事実で、強制ではなかった。

「労働者の強制連行」も、同じ国民として内地人と同様に、国家総動員法による動員であり、朝鮮人だけに発令されたものではない。「慰安婦問題」も亦、公娼制度の時代で強制連行する必要はなかった。自由に募集されていた時代であり、慰安婦の最も多かったのは日本人であった。

北朝鮮は金日成以来、独裁政治を行使して軍の力だけで国民を押えつけ、核や生物学兵器を開発して近隣諸国を脅かして来た。農業は不毛で国民は食うや食わず、餓死者や脱北者が続出するのは、この国が地獄だからである。平然と拉致を続けてきた国の何処に樂園があるのだろうか。

人は老齢になると、子供と同じように無邪気に振る舞うようになり、これを『七十の三つ子』と言う。私はそれよりも十年も長生きした。傘寿を過ぎて耄碌することは自然現象であり、その上に非才が重なり、この「金日成」も駄文となることは致方なしである。

「四海は兄弟」と言われているが、金王朝は「自家撞着」（言っていることと、行っていることがどこかおかし、辻褓が合っていない）としている。「地蔵の顔も三度」（どんなにおとなしい人でも、度々馬鹿にされたり、ひどい世打ちをされたりしたら、最後は怒ることの概え）、「自分のぼんのくぼは見えず」（自分の欠点や穢は、自分では気づかずにいるものだ）、「真の闇より無闇が怖い」（真暗やみより、考えもなく無闇にすることの方が怖い）、「提灯で餅搗く」（物事はどんなことでも、自分の考えているようにはいかないものだ）。

以上のような「日本の諺」を金王朝に贈り、『あとがきの辞』とする。（平成15年3月30日）

『付記』『イラク戦争』

54頁にイラク戦争勃発を書き、「ならぬ堪忍、するが堪忍」と記した。「我慢できないこと
を、じっと我慢するのが本当の堪忍」だと説いたつもりで、私の好む諺の「堪忍五両思案十両」
の意味も、非常に腹が立っても我慢していれば、必ず後で得をする、と言う意味である。第二次
世界大戦以後のアメリカは世界制覇主義を目標とし、冷戦崩壊からは一国覇権主義となって行き、
世界の警察官を気取ってきた。だから世界の何処かに常に敵を作る必要が生まれたのである。

アメリカのブッシュ政権は9・11テロを利用して、世界に最強の覇権主義を確立しようと焦
り、「悪の枢軸」論を提唱した。その筆頭としてイラクが狙われたのである。しかし国連では、
常任安保理五ヶ国の仏・露・中が反対するばかりか、非安保理国の大半も、大量破壊兵器の査察
の延長を主張して戦争には反対した。追い詰められたアメリカは国際社会に決断を迫った。

アメリカにとっては北朝鮮よりも、イラクが重大であった。それはイスラム教対キリスト教と
いう宗教戦争の印象を薄めるためである。かつて黄色人種対白色人種の戦争イメージを避けるた
めに、中国の蒋介石国民党を支援し、日中分断に成功して日本に勝利した戦略は、まだ生きてい
た。つまり本音はイラク攻撃であり、北朝鮮は二の次である。

12年前の湾岸戦争後の世界秩序の形成とアメリカの覇権確立のため、イスラエルとパレスチ
ナの紛争の絶えない中東地域では、米国とイスラエルの戦略的関係を強化させる必要性があった。
それはイラクのフセイン政権を転覆させ、イスラエルを中心に中東の地図を塗り替えることであ
る。そしてフセイン無き後のイラクには1921年から58年まで同国を統治したハシム家を復
活させるという具体的な案まで計画されていると言う。アメリカは中東における唯一の民主主義
国家で、アメリカ経済を支配するユダヤの故国イスラエルのため、軍事力を行使したのであった。

アメリカは宗教的な信念を持っている国であるが、彼等が決めつける敵を悪魔よばりして、徹
底的に叩きつぶす歴史的傾向がある。非戦闘員の犠牲を出さないと宣言しながら、イラクでは無
辜の民が死んでいる。昔、彼等はインディアンを虐殺し、東京大空襲や広島、長崎の原爆投下で
徹底的に破壊殺傷し、ベトナム戦争では枯葉作戦の生物化学兵器を使用して焦土作戦を行った。
自国では民主主義の手本のような米国は、世界という舞台では民主主義的ではないのが特徴だ。

戦争、特に生き地獄のような戦闘を身を以て体験し、多くの部下を犠牲にして自らも3回に及ぶ負傷もし、九死に一生をえた者として「戦争は絶対反対」である。戦後、何のために国連を作ったのか。その原点に立ち返らなければならない。米英のように国連を無視して強行したイラク戦争は許せない。国連の信頼を取り戻せと絶叫する。地球は米英だけのものではないのだ。

アメリカは建国以来、大小あわせて約200回の武力行使、戦争状態を経験している。宣戦布告は議会の権限だが、しかし、議会の承認を得て武力行使に踏み切ったのは5回だけである。ここに民主主義・議会主義が存在するのか。存在するのは米国が「好戦国」と言うことだけである。

世界経済は悪化の道を進んでいる。そこで戦争経済で経済危機を乗り越えようとするのは邪道だ。彼等は世界の資源を自分の都合の良いように管理しようとし、自国民の目に別な方向に向けさせようとしている。そこに覇権主義が隠されているのだ。

イラクのフセインも解せない人物である。バース党が完全に権力を掌握したのは1968年。サダム・フセインは31才で革命評議会の副議長に就任し、権謀術数と暗殺で党の権力を獲得したサダムは、79年に大統領になった。病身のバクル大統領を脅迫してテレビカメラの前に立たせ、国民の前でサダムへの禅譲の演説をさせた。大統領に就任した6日後には、多くの政敵の党高官や軍幹部を陰謀を企てたとして銃殺した。これは北朝鮮の金日成と同様である。

日本の小泉総理は3月20日、米国のイラク攻撃を支持した。これは、アメリカは日本への攻撃は自国への攻撃と見做すと明言した唯一の国だからであった。総理は北朝鮮を意識しての決心だと思う。一国の総理ともなると「戦争反対」だけでは国民を守ることはできず、我が意見と相違するが已むを得ないと同情したい。勿論、国民の多くは危険な対米追随だと主張しているが、総理の立場と個人の立場では矛盾することもあるだろう。！！『平和は人類最高の理想だ』！！

この拙劣な駄文はイラク戦争が目的ではなく、戦争の記事は記さないことにした。今日、3月31日現在の戦線は、バクダット南方約100キロ付近であり、本格的な決戦はこれからである。

平成15年3月31日記

寺 前 信 次